

タイトル	アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』：翻訳・註解(その1)
著者	安酸，敏眞
引用	北海学園大学人文論集，40：1-58
発行日	2008-07-31

アウグスト・ベーク
『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』
— 翻訳・註解（その1） —

安 酸 敏 眞

本稿は、アウグスト・ベーク（August Boeckh, 1785-1867）の古典的名著 *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1877); 2. Aufl., herausgegeben von Ernst Bratuscheck, und besorgt von Rudolf Klusmann (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1886) の「序論」(Einleitung)と「第一部」(Erster Haupttheil)を、ドイツ語原典から日本語に翻訳すると同時に、必要と思われる箇所に註解を施そうとする試みである。翻訳の底本としては、改訂増補された1886年の第二版を用いているが、1877年の初版本と、第二版の第一部のみを復刻したりプリント版 August Boeckh, *Enzyklopädie und Methodenlehre der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1966)をも、同時に参照している。なお、英語による抄訳 *On Interpretation and Criticism*, translated and edited by John Paul Pritchard (Norman, Oklahoma: University of Oklahoma Press, 1968)も参照したが、この英訳本はあちこちでテキストが短縮されている上に、ときに原文からの忠実な翻訳と、訳者による要約とが不明確に混在しており、細部に関しては必ずしも助けにはならなかった。

ベークならびに本書の意義に関しては、本誌第37号に掲載された拙論「アウグスト・ベークと文献学」¹において概要は述べたので、ここでは繰り返す必要はないが、ベークが古典文献学のみならず解釈学の歴史にとって、

いかに重要な位置を占めているかについては、言を俟たない。彼は草創期のベルリン大学哲学部の「スター軍団の一人」²として、それも最年少の正教授として、栄えあるベルリン大学の歴史に不朽の足跡を残しており、その学問業績はいまだに多くの学者の賞賛するところである。しかし古典文献学がしっかり根づかなかったわが国においては、ベークの学問的業績はおろか、その名前さえも正しく伝えられずに今日に至っている。わが国でもシュライアーマッハーやヘーゲル、ドイツ歴史学派やディルタイ、あるいはハイデッガーやガダマーを専門的に論じる人々は、ときおり通りすがりにベークにも言及するが、その知識は普通セカンドハンドな間接情報によるもので、きわめて断片的かつ不正確である。大抵の場合、彼らは本書を繙いたことすらないことが多い。ここには明治以来のわが国の人文学がかかえてきた、特殊日本な問題性が潜んでいると思うが、いずれにしても、19世紀のドイツ歴史学が生み出した学問的精華の一つである本書を、信頼できる形の翻訳において紹介することの意義は、決して小さくはないであろう。

この書の表題を普通に訳せば、『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』となるであろうが、実はこのように翻訳してしまうと、ベークが論じている重要な問題が最初から見失われてしまう可能性がある。なぜなら、本書の序論においてベークは、文献学 (Philologie) という学問がいかなるものであるかを、まさに文献学の技法を駆使して多角的に論究しているのであるが、ドイツ語の Philologie — あるいはその語源であるギリシア語の φιλολογία やラテン語の philologia — を「文献学」という翻訳語に置き換えてしまうと、そこに含まれる豊かな多義性が理解できなくな

¹ 拙論「アウグスト・ベークと文献学」『北海学園大学人文論集』第37号(2007年10月), 119-165頁所収。

² Volker Gerhardt, Reinhard Mehring, und Jana Rindert, *Berliner Geist. Eine Geschichte der Berliner Universitätsphilosophie* (Berlin: Akademie Verlag, 1999), S. 55.

るからである。広辞苑によれば、「文献学」という用語は上田敏による訳語で、それは「文献の原典批判・解釈・成立し・出典研究を行う学問。また、それに基づき民族や時代の文化を研究する学問。言語学の意にも用いた」と説明されている。なるほど、この説明に間違いはなからうが、しかしこれだけだと、なぜ「文献学」が「言語学の意にも」用いられたのかわからないし、バークが述べているような、「文献学」と「哲学」の語源的類縁性も明らかにならない。

思うに、明治維新以降今日に至るまで、わが国で文献学なる学問がしっかり根づかなかった要因は、西洋の Philologie が主に対象としているギリシア・ローマの古典古代の文化が、わが国の伝統文化に直接的な影響関係をもっていないというだけでなく、そこには Philologie を「文献学」という翻訳語に置き換えて理解しようとしたことにも、その一因があったのではあるまいか。バークが詳しく述べているように、Philologie を語源的に考えてみると、それは φιλολογία、つまり「ロゴスへの愛求」であり——ここに φιλολογία と φιλοσοφία の類縁性が見てとれる——、ギリシア語のロゴス (λόγος) に含意される多義性が、文献学という概念の多面性・重層性を形づくっていることがわかる。しかし「ロゴス」の多義性を捨象して、それを一面的に「言語」や「言語表現」に置き換え、かかる手続きを通して「ロゴスへの愛求」を「言語への愛求」や「文献への愛求」、すなわち「文献学」へと変換してしまうと、Philologie がもともと有していた豊饒な世界は、すっかりやせ細って哲学的精神とは無縁なる、単なる書誌学や訓古学のたぐいに成り下がってしまう。それゆえ、Philologie を「文献学」という翻訳語に置き換えることをやめ、当初は一貫して片仮名で「フィロロギー」と表記しようと考えた。しかしそうすると、Philologe は「フィロローグ」、philologisch は「フィロローグッシュ」としなければならなくなる。だが、「フィロローグッシュ」はいいとしても、「フィロローグ」は日本語としてさすがに違和感がある。そこで、最終的には「文献学」「文献学者」「文献学的」という常套的な訳語を採用し、片仮名表記が望ましい場合に限り、「フィロロギア」「フィロロギー」などと記すことにした。

筆者は専門の古典文学学者でも歴史学者でもなく、思想史研究に取り組んでいる過程でたまたま本書に出会い、ベークの学殖と慧眼に圧倒された一読者にすぎないが、本書には今日盛んな解釈学論議にとつてのみならず、筆者が専門としている思想史研究にとつても、傾聴すべき卓越した洞察が随所に含まれている、と確信してやまない。そこでみずからの浅学非才を顧みず、敢えてこの古典的名著の翻訳に挑むのであるが、ギリシア語やラテン語の原典からの引用に関しては、手元に十分な資料がないことや、そもそも古典語の素養がないこともあって、不正確や不確実なままにとどまっている場合が少なくない。読者のご寛恕と、誤りがあればその御指摘を願う次第である。

なお、「序論」と「第一部」の内容をあらかじめ目次の形で紹介しておく、以下のようになっている。

序論 (Einleitung)

- I. 文献学の理念、またはその概念、範囲、最高目的 (Die Idee der Philologie oder ihr Begriff, Umfang und höchster Zweck)
- II. とくに文献学に関連してのエンチクロペディーの概念 (Begriff der Encyklopädie in besonderer Hinsicht auf die Philologie)
- III. 文献学的な学問のエンチクロペディーについての従来の試み (Bisherige Versuche zu einer Encyklopädie der philologischen Wissenschaft)
- IV. エンチクロペディーと方法論の関係 (Verhältniss der Encyklopädie zur Methodik)
- V. 全研究の資料と補助手段について (Von den Quellen und Hilfsmitteln des gesammten Studiums)
- VI. われわれの計画の草案 (Entwurf unseres Planes)

第一主要部 (Erster Haupttheil) : 文献学的な学問の形式論 (Formale Theorie der philologischen Wissenschaft)

一般的概観 (Allgemeine Ueberblick)

第一部 (Erster Abschnitt) : 解釈学の理論 (Theorie der Hermeneutik)

解釈学の定義と区分 (Definition und Eintheilung der Hermeneutik)

1. 文法的解釈 (Grammatische Interpretation)
2. 歴史的解釈 (Historische Interpretation)
3. 個人的解釈 (Individuelle Interpretation)
4. 種類の解釈 (Generische Interpretation)

第二部 (Zweiter Abschnitt) : 批判の理論 (Theorie der Kritik)

批判の定義と区分 (Definition und Eintheilung der Kritik)

1. 文法的批判 (Grammatische Kritik)
2. 歴史的批判 (Historische Kritik)
3. 個人的批判 (Individuelle Kritik)
4. 種類の批判 (Generische Kritik)

ところで、原著にはアスタリスク (*) つきの脚注がついているが、その大部分はベークの七巻本の『小品集』 *Gesammelte kleine Schriften* の関連箇所への言及である。それゆえ、これについても少し説明を加えておくと、第一巻から第三巻までは生前に出版されたものである。ベークが着任した古典文献学の教授のポストは、「雄弁ならびに詩歌の教授」(professor eloquentiae et poeseos) のそれを兼ねており、彼は古い大学の慣行に倣って、毎学期の始めに刊行されるラテン語による講義目録に、「プロオイミオン」(Proömium) と呼ばれる序文を書くことを義務づけられていた。そのため、ベークは半世紀の長きにわたって、半年に一度ラテン語で (のちにはドイツ語で) 学識に富む「プロオイミオン」を書き続けたが、これとは別に大学の公式行事や式典に際して、あるいは国王の誕生日の祝典に際して、ラテン語で祝詞を述べることも求められた。したがって、ラテン語とドイツ語で記されたり語られたりした大小さまざまな言述や演説が、『小品集』の最初の三巻を形づくっている。それを順に記せば、Bd. 1, *Orationes in universitate litteraria Frederica Guilelma Berolinensi habitae*. Edidit Ferdinandus Ascherson. Leipzig: B. G. Teubner, 1858, Bd. 2, *Reden gehalten auf der Universität und in der Akademie der Wissenschaften*

zu Berlin. Herausgegeben von Ferdinand Ascherson. Leipzig: B. G. Teubner, 1859, Bd. 3, *Reden gehalten auf der Universität und in der Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1859-1862; und, Abhandlungen aus den Jahren 1807-1810 und 1863-1865*. Herausgegeben von Ferdinand Ascherson. Leipzig: B. G. Teubner, 1866 である。これに没後さらに以下の四巻が付け加えられた。すなわち, Bd. 4, *Opuscula Academica Berolinensia*. Ediderunt Ferdinandus Ascherson, Ernestus Bratuscheck, Paulus Eichholtz. Leipzig: B. G. Teubner, 1874, Bd. 5, *Akademische Abhandlungen vorgetragen in den Jahren 1815-1834 in der Akademie der Wissenschaften zu Berlin*. Herausgegeben von Paul Eichholtz und Ernst Bratuscheck. Leipzig: B. G. Teubner, 1871, Bd. 6, *Akademische Abhandlungen vorgetragen in den Jahren 1836-1858 in der Akademie der Wissenschaften zu Berlin; nebst einem Anhang epigraphische Abhandlungen aus Zeitschriften enthaltend*. Herausgegeben von Paul Eichholtz und Ernst Bratuscheck. Leipzig: B. G. Teubner, 1871, Bd. 7, *Kritiken; nebst einem Anhang*. Herausgegeben von Ferdinand Ascherson und Paul Eichholtz. Leipzig: B. G. Teubner, 1872 である。その結果、現在では『小品集』は全七巻本となっているが、これについては2005年にヒルデスハイムのゲオルク・オルムズ社からリプリント版が出ている。

なお、翻訳にあたって、ギリシア語およびラテン語の語句に関しては、必要に応じてその言葉の大体の意味を〔 〕に括って示すことにしたが、その表記の仕方は必ずしも一定していない。一般の読者にあまり親しみのない人名や語句に関しては、短くて済む場合にはブラケット([])に括って割注のかたちで、長くなる場合には脚注のかたちで、筆者なりの説明を施すことにした。脚注にはアラビア数字の通し番号を振ったが、原注に関してはアステリスク(*)を用い、脚注とは区別がつくようにした。翻訳に際して一番心がけたことは、原文を正確に理解した上で、いかに日本語として自然な流れで読めるようにするか、ということである。そのために補った部分も、〔 〕に括って示すことにした。

[翻訳・註解]

序 論

I. 文献学の理念、またはその概念、範囲、最高目的

§1. ひとつの学問あるいは学問的分野の概念は、そのなかに含まれているものを一つずつ列挙することによって与えられるものではない。このことはなるほどあまりにもわかりきったことのように思われる。しかし多くの人は、文献学〔フィロロギー〕を^{アグレガート}集合体にすぎないものと見なすことに慣れており、そして文献学をそのように見なす人々は、部分を列挙することのうちに存しているような概念以外には、もちろんいかなる他の概念も与えることができない。すなわち、根本的にはまったくいかなる概念も与えることができない。各々の学問の実際概念は、それゆえにまた文献学の実際概念は、もしそれがおよそ学問的なものを含むべきであるとすれば、部分に対して次のような関係に立たざるを得ない。すなわち、その概念はあらゆる部分から生ずる諸概念に共通なものを包括し、部分は悉くそのうちに諸概念として含まれており、そして各部分は、与えられた区分から生じる一定の限定をもってではあるが、全体の概念をみずからのうちでふたたび表現している、といった関係である。その部分を列挙することによって文献学を定義することは、プラトンが『大ヒippias』のなかでヒippiasに語らせている、「美というのは美しい乙女、黄金、等々」という美の定義と比べて、毫もすぐれたものではない³。もし誰かが、論理学、道徳論、哲学的法理論、宗教哲学、自然哲学もそこに含まれているという理由で、哲学を思惟形式、道徳、法、宗教、自然についての学問として定義しようとするれば、そのひとはもの笑いになるであろう。哲学の概念というのは、それらに共通しているものである。それらの分野の各々は、完全

³ 「ヒippias (大)」286 D-298 B, 『プラトン全集』第10巻, 北嶋美雪・戸塚七郎・森進一・津村寛二訳『ヒippias (大)・ヒippias (小)・イオン・メネクセノス』(岩波書店, 1975年), 19-52頁参照。

に哲学ではあるが、ある特定の方向性に限定された仕方です。そのようなものであり、そしてかかる特定の方向性は、その概念そのものから生じてこなければならぬ。文献学においても事情は同じである。あの数量的な概念規定のやり方は、総体を示すものに過ぎない。それは素材〔質料〕(Stoff)を表しているだけで、なぜそれ以上でもそれ以下でもなく、まさにこの素材が、文献学を構成しているのかということは、わからず仕舞いである。しかし同一の素材が、複数の学問に共通していることはあり得るし、例えば、哲学と文献学が同一の素材を有しており、そして素材の多くの領域が、文献学と歴史学に共通しているとか、同様に、哲学と博物学に共通しているということは、ただちに明白である。一般的に、自然と精神あるいはその発展たる歴史は、あらゆる認識の普遍的素材である。それゆえ、素材に関連したいわゆる概念をもってしては、わずかのことしか語れないが、にもかかわらず、普通ひとが文献学について作り上げる諸概念は、大抵はそれを超えたところまで進むのである。素材に対置されるのは学問の形式(Form)であるが、これは素材へと向けられた、取り扱い方あるいは活動のうちに存している。しかし、もしそれに一定の素材が差し向けられないとすれば、もちろん単なる取り扱い方のなかに学問の概念を求めることもまたできない。それにもかかわらず、若干の人々は文献学の概念を形式のうちにのみ設定してきた。明らかに〔素材と形式の〕両方が概念のうちに含まれていなければならない。けれども、かかる要求に合致するところの文献学の概念を証明する前に、この学問が普通それにしたがって定義される、主要な見解を批判的に照らし出してみようと思う。見解がまちまちだということは、一般的に本件に関して人々が不明であるということを示している。ここで与えられるべき批判は、概念規定にとってひとつの準備をなすものであるが、これはある程度弁証法的になさなければならない。わたしはこれからかかる批判を幾分詳細に行うことにする。なぜなら、諸概念に関して方向づけを与え、多様にもつれた錯綜状態をほぐし、総じて収集された素材を概念へと仕立て上げることは、エンチクロペディー⁴においてまさに肝要なことだからである。

われわれは文献学の本質に関する様々な見解を、次の二つの点に関して評価しなければならない。すなわち第一に、それらには文献学を他の諸科学から区別されたものとして特徴づける学問的概念が基礎となっているかどうか、そして第二に、もしそのようなものと認められたとしたら、その場合、言葉の実際の意義にしたがって、また経験に則して文献学に固有である諸々の努力にしたがって、この概念のうちに歴史的に文献学に算入され得るようなものが含まれているかどうか、ということである。ここでは恣意的に一つ概念を出発点として措定することが問題なのではない。そうではなく、われわれは現に存在するもの (ein Seiendes) を、しかも幾つもの努力を含んでいるような、現に存在するものを眼前にしているのであり、そこから例の概念を取り出さなければならないのである。だがひとはこうした批判を行う際に、第三に、歴史的にも経験的所与にしたがっても、文献学は明らかに一大研究であって、例えば自然科学における昆虫学のように、決して下位に置かれた小さな分野ではないということ、したがって、文献学の真の概念は非常に広範なものでなければならないということ、念頭に置かななければならない。一般に、正しい考察においては、共通感覚⁵

⁴ エンチクロペディーの概念については、原典 34-37 頁の「II. とくに文献学に関連してのエンチクロペディーの概念」(Begriff der Encyclopädie in besonderer Hinsicht auf die Philologie) においてより詳細な議論がなされているが、これはギリシア語の ἐγκύκλιος (円形の、環状の、循環性の、回覧的な) と παιδεία (教養) から造語されたものである。「エンキュクリオス・パイディア」(ἐγκύκλιος παιδεία) は、元来、ギリシアに生まれた自由人の若者が特定の専門を修得する前に身につけておかなければならない普通の範囲の教養を意味した。したがって、それはもともとは「予備教育」(Propädeutik) に相当するものであったといえよう。しかし 18 世紀以降、この概念はそれぞれの学問分野において、その学科目の概念やそれが取り扱う対象や方法を、包括的・体系的に論述した講義や書物に適用されるようになった。

⁵ ここで der gemeine Sinn を「共通感覚」と訳したが、この概念には元来異なった二つの意味があると言われている。一つはアリストテレスに発するもので、

がその概念に付け加えるところの、あらゆる恣意的な制約が廃棄され、必然的かつ内的な諸関係のみが際立たせられなければならない。所与の諸関係にしたがえば、多くの人々の生の目的であり、また生の目的であるべき研究においては、まさにとりわけそうである。恣意的な制約を設定すると、それによって考察は通常才気に欠けたものとなり、学問の本質はここでは認識されなくなる。通常の見解に対するわれわれの批判は、最初は混乱しているように見えるであろう。だがまさにこの混乱から、われわれは本当の明瞭性へと到達し、文献学の真の本質を知るようになるであろう。そこから文献学の全体が、首尾一貫した仕方です問的かつ有機的に形成され、その結果、混乱し、脈絡を欠いた本質と衝動に、それ自体において明瞭で脈絡のあるものが、対置されることになるであろう。

1. 文献学〔フィロロギー〕についての以下の二つの見解は、すべてのなかで最も広まっているものである。すなわち、文献学は古典古代研究 (Alterthumsstudium) であるというのと、文献学は言語研究 (Sprachstudium) であるというのがそれであるが、どちらも同じくらい根拠のないものである。

文献学はさしあたり古典古代研究 (Alterthumsstudium) として捉えられ

彼によれば「視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚」という五つの個別感覚 (五感) は、それぞれ「色、音、臭い、味、固さ」という固有の感覚対象を把握する能力であるが、人間にはこれらの個別感覚とは別に、それらを横断的に把握する統合的な能力が具わっている。アリストテレスはこれを「共通感覚」(κοινή αἴσθησις) と名づけた。もう一つは、古代ローマのキケロラのいう「人間に共通する感覚」としての「共通感覚」で、これは人間が社会生活を営んでいく上で不可欠な共通の基盤であり、近代語のいわゆる「コモンセンス」、つまり「常識」を意味する。

起源を異にするこれら二つの概念は、歴史の歩みのなかでやがて輻輳し、古代、中世、近世、そして現代にいたるまで、その重なり合いのなかから豊かな思想を紡ぎ出してきている。しかしベークはここで必ずしもこの概念に特別な意義を付与しているわけではない。

てはならない。歴史的な道を辿って以下に示されるであろうことは、フィロロギア (φιλολογία) という言葉そのものは、これを刻印した学者たちの考えでは、いわんや通常のギリシア的な見解では、決してこのような意味を持たなかったということ、そしてかかる意義は偶然的にその言葉に貸与されたものにすぎなかったということである。古典古代研究ならアルカイオロギア (ἀρχαιολογία) [古くからの言い伝え, 古代誌] であって、フィロロギア (φιλολογία) [原義は「言論好き」、転じて「学問好き」] ではない。フィロロギア (φιλολογία) の反対はミソロギア (μισολογία) [言論嫌い] であるので、もし文献学が古典古代研究であるとすれば、ミソロギア (μισολογία) は古典古代の蔑視と同義ということにならざるを得ないだろう。それゆえ、[文献学を古典古代研究と同一視する] こうした見方が言葉の意義に基礎づけられていないように、それはまた事実的に文献学に属しているすべての努力を決して包括するものではない。なぜなら、例えばイタリア文学ないしイギリス文学に従事する人、あるいは何らか別の民族の文学と言語に従事する人は——ここでは文学と言語のみについて語るとして——誰もが文献学的な努力をしているが、このことは経験的に明白ではないからである。すべての文献学者は、古典古代に関して行っていることを、近代に関しても、例えば、ダンテや、シェークスピアや、あるいは中世の何某かの対象に関しても、行っている。あらゆる批判と解釈は、事実上文献学的であり、そして後ほど示されるように、文献学者の形式的行為は、全面的に批判と解釈に帰着するので、文献学は古典古代研究に制限されることはできない。なぜなら、その機能はすべての近代にも触れるのであるからである。その上、古典古代研究の概念は学問的に閉じられたものではない。学問にとっては、古いとか新しいということは偶然的なことである。それゆえ、時代による限定はさしあたりのことであって、概念規定にとっては全く恣意的なものと思なされるべきである。古典古代研究のなかには、あらゆる種類の知の集合体が含まれている。それが教えることのできるものはすべて、他の何らかの学問に属しており、したがって、もしわれわれが文献学の概念を別の仕方では立てないならば、およそ爾余の諸科

学からそれを区別するものがわれわれには欠けている。文献学を爾余の諸科学から区別するものは、古典古代の概念が非本質的なものである以上、そのなかには存在することができない。それにまた、それを補完するものとしての近代のない古典古代も理解できない。無数の実例が証明しているように、誰も近代を直観することなしに、古典古代をおのずから究明することはできない。文献学をギリシアとローマの古典古代に限定することは、同様に、恣意的であり、それゆえその概念の中に受け入れることはできない。そのようなことは、ヘブライやインドや中国の文献学、一般的に東洋の文献学に対して、たしかに持ちこたえられない。ギリシアとローマの古典古代がいかに偉大で崇高であろうとも、文献学の概念はそれには限定され得ない。文献学の概念は、文献学本来の活動が提供するところのものによってのみ、規定されることができる。

2. そこからして、文献学を言語研究(Sprachstudium)と同一であると宣言することが、適切であると思われるだろう。しかも〔その言語研究は〕古代の言語に限定されているのではなく——そんなことをすれば、ふたたび第一の見解の一部と間違えられることになろう——、普遍的に——わたしはそう名づけたいが——ポリグロッティー〔多国語〕としてのすべての言語を対象としている、と。それにもかかわらず、フィロロギア(φιλολογία)という言葉は、後ほど示されるように、この研究を基礎づけた人々においては、このような意味ももっていなかった。ロゴス(λόγος)は言語ではなく、言語ならグロウッサ(γλώσσα)〔舌、口；言語、言葉〕である。言語形成においても、人間精神が無数の民族を通して歩む密かな行程を追跡することは、偉大なことではある。さらに言語学は特別な学問として樹立されなければならない以上、真に区別するものは言語学の概念のなかに存している。にもかかわらず、言語は思想によって制約されており、それゆえ思想もまた言語研究者によって知られていなければならない。したがって言語研究者は、単に言語の領域に留まることはできない。だとすれば、名前のことは別にしても、文献学が言語研究であるということは、事実上またしても間違いである。なぜなら、研究の最初から文献学がみず

からのうちで捉えてきたすべてのものの大部分は、ほとんどが文法学ではないからであり、それにまたこのような見方は文献学に属する努力のすべてを必ずしも包括もせず、またこの研究の偉大さにもほとんど合致せず、むしろその主要部分を含んでいるにすぎないからである。明らかに文献学的である文学史ですら、概念の厳格さにしたがえば、言語学から排除されることになるであろう。なぜなら、文学史を含めると普通よりも拡張した概念を言語学に与えなければならないからである。ちなみに、われわれは文法学からその価値を減じているのではなく、ただ次のように主張しているのである。すなわち文献学は、一定の関係においては形式的なものにすぎず、非常にしばしば思想面での空虚さを後に残す、こうした研究のみに従事しているのではなく、むしろその目的と概念はより高い次元に存している、ということである。あるいは文献学は、精神を単に文法的な理念だけでなく、あらゆる種類の理念で満たさなければならないような、そうした教養を与えるものであり、このことのみが文献学的な研究の実際の意義に合致している、ということである。

3. 後者の視点から、多くの人々が行ってきたように、文献学を博覧 (Polyhistorie)⁶ と同一視するとき、これを受け入れることができるように思われる。にもかかわらず、そこには他のものと区別する統一性が欠けているので、博覧が決して学問的概念ではないことは明白である。というのは、学問にとって肝心なことは、量の多少にはあまり存しておらず、あるいはむしろまったく存していないからである。多量の知識はまさにまた、まだ何か一つの知識をすら与えるものではない。「博学は精神を生み出さず」 (πολυμαθίη νόον οὐ φύει), とヘラクレイトス [Herakleitos, B.C. 535 頃-B.C. 475 頃。古代ギリシアの哲学者。万物は永遠の生成消滅のうちにあるが(万物流転)、同時にそこに不変の秩序(ロゴス)が見てとれると説いた。] は述べている⁷。博覧は生も、精神も、心も捉

⁶ Polyhistorie あるいは Polyhistor というのは、 πολυϊστορω [知識・経験の豊かな] を語源とするラテン語の polyhistor に由来するが、これは多くの学問を渡り歩いて多面的な知識を有している博識者を意味する。

⁷ ベークはここでヘラクレイトスの言葉として、このようなギリシア語の語句

えない。それは何らかの明確な限界づけと理念とを欠いた単なる粗野な経験知、未加工の素材を集合体として蓄積したもの、非学問的な記憶の所産、あるいはそれどころか指先の仕事にすぎないものである。なぜなら、少なからぬ人が〔読書のメモとして作成した〕大きな抜粋集や書コレクターネン アドフェルザリエン 抜帳をもっている、すでに多くのことを知っているとすら信じるからである。

4. そのような寄せ集めの仕事と違って、少なからぬ人は批判(Kritik)⁸を文献学の専一的な課題と見なしている。普通になされているその営みについては好意的に語れないが、それにもかかわらず、批判についてはもちろん好意的に語る事ができる。すなわち、批判は分別を通して素材を整理するのである。しかしわれわれが批判にそれに可能な最高の視点を与え

を引用しているが、一般的に知られているのは「博学は精神に教えず」(πολυμαθία νόον οὐ διδάσκει) (Herakleitos-Diog. Laertios, IX, 1, 2, 1) という表現であろう。

⁸ 「まえがき」に示したとおり、Theorie der KritikはTheorie der Hermeneutikとともに、ベークの解釈学理論——「文献学的学問の形式論」(Formale Theorie der philologischen Wissenschaft)——の中核を形づくっているが、Kritikにどういう訳語を充てるべきかは、意外に難しい問題を含んでいる。カントの『純粹理性批判』*Kritik der reinen Vernunft*や『実践理性批判』*Kritik der praktischen Vernunft*を引き合いに出すまでもなく、哲学の領域ではKritikは一般的に「批判」と訳されているが、一方文学の領域では、die Kritik über Kunst und LiteraturあるいはKunstkritikといえ、通常「文芸批評」と訳される。それゆえ、「批判」と「批評」のいずれを採るべきか選択に迷うが、もちろんそれは意味されている中身によって決まるだろう。ところで、ベークの文献学から多くを学んで、それを日本思想史研究に応用した村岡典嗣は、処女作『本居宣長』において、Kritikを「考証」と訳している(村岡典嗣著、前田勉校訂『増補 本居宣長2』平凡社、2006年、29頁)。この訳語はなかなか示唆に富んでいるので、当初は「考証」という訳語を採用することも検討してみたが、その村岡も別のところでは、Theorie der Kritikを「批判学」と訳している(村岡典嗣『日本思想史概説——日本思想史研究第四巻』創文社、1961年、25頁参照)。そこでいろいろ考えあぐんだ結果、最終的には、月並みながら「批判」という訳語で通すことにした。

るとしても、すなわち特殊なものや普遍的なものとを比較し、そして取り扱うすべての事物の相互関係を、それに基づいて規定するものと見なすとしても、批判はやはり純粹に形式的なものであり、そのかぎりではそれによって突き止められるものに到達するための手段にすぎない。これに対して学問は、決して単なる手段ではなく目的である。批判はまた熟練であり、したがって技術であり、学問ではない。文献学はそれゆえ、もしわれわれがそれを学問と見なすべきだとすれば、そしてわたしはそのようなものだと見なすのであるが、何か別のものでなければならない。文献学がそれ自体として目的ではなく手段であるような人、そして文献学によって形式的修練以外の何物も得ようと欲しない人、そのような人にとって文献学は批判に帰着するかもしれない。しかしこれは、文献学的な学問が事実上最初から定めてきた、高次の目標とは合致しない。それにまた真の批判は、実質的知識を前提としており、したがって高次の意味での文献学の一部として捉えられないのであれば、存在することすらできない。なんとなれば、かかる文献学において、実質的なものは同時にそこで与えられているからである。まことに批判は文献学者の形式的活動全体を汲み尽くすことすらしない。明らかに解釈もまたその一部をなしているからである。

5. 文学史 (Literaturgeschichte) の概念も、部分的に文献学と同一視されるが、同様に漠然としている。然るべき箇所を示されるべきであるが、その真の概念にしたがえば、文学史は言語作品の形式についての認識である。しかしこれは文献学的全範囲を汲み尽くすものではなく、文献学に含まれている下位の概念であることは、それ自体として明白である。とはいえ、ひとはしばしば文学者と文献学者とを混同してきた。しかも、これについては下でさらに述べられるべきであるが、すでに初期からそうであり、そしてもしひとが litterae〔書かれたもの一切、文学作品、学問、学識〕の概念を、拡張された仕方ですく捉えたとすれば、これに異論を唱えることはできない。しかしその場合には、表現はあまりにも漠然としている。これに対して厳密に捉えようと、それはあまりにも狭い意味を与える。文献学と古典古代学とについての彼の概念は、非常に限られたものであったが、

カントは文献学を「書物や言語についての批判的知識（書誌と語学）」と定義している（論理学，序論，VI）⁹。この定義は経験的にいっても正しくないし，これでもっては何一つ始めることができない。なぜなら，それは学問的連関を欠いた様々な事物の集合体を言い表したものにすぎないからである。彼は古典人文学（Humaniora）¹⁰を，「古典古代人という模範に適合するよう趣味を育成するのに役立つような指図」¹¹として，文献学から区別している。かくして文献学から美的感覚すらも剝奪される有様である。だが古典古代からこの方，文献学から人文学を分離したひとは誰もいない。

6. 多くの人々は，まさに一般的に，文献学を人間性の研究（Humanitätsstudium）と名づける。だがこの定義もまた非学問的であり漠然としている。それは，純粹に人間的なものの養成に役立つことによって，一定の研究がもたらす益に関係しているにすぎない。それゆえ，その概念は理論的なものではなく，実践的なものであって，そこでは文献学は手段として現れる。そしてここからは全く何も推測され得ない。なぜなら，人間性の形成は単にこの研究の結果であって，この研究の内容を表示しないからである。ちなみに，そこにはまた何らかの特徴的なもの，あるいは他と区別するものすら存在しない。なぜなら，彼らの研究がもつばら人間性の形成に寄与するというのは，大抵は経験によっては全く正当化されない，

⁹ *Kants Werke*. Akademie Textausgabe Band IX, *Logik, Physischer Geographie, Pädagogik* (Berlin: Walter de Gruyter, 1968), S. 45; 『カント全集』第17巻，湯浅正彦・井上義彦・加藤泰史訳『論理学・教育学』（岩波書店，2001年），63頁。

¹⁰ Humaniora というのは，ラテン語の形容詞 humanus（人間の，人間らしい，気品ある，洗練された）の比較級 humaniora から派生した，近代ラテン語の studia humaniora に由来し，教養の基礎としての，あるいは授業科目・試験科目としての，古典古代学をさす。

¹¹ *Kants Werke*. Akademie Textausgabe Band IX, *Logik, Physischer Geographie, Pädagogik*, S. 46; 『カント全集』第17巻，湯浅正彦・井上義彦・加藤泰史訳『論理学・教育学』（岩波書店，2001年），63頁。

文献学者の思い上がりにすぎないからである。真実に営まれる場合には、あらゆる学問は、そしてとりわけ哲学は、人間形成に寄与しなければならない。そして神事の学問たる神学は、もちろん、ときおりまさしく人道的なことに反抗するが、それにもかかわらず、もし神学がこれをなさないとするれば、それは本当にまずいことであろう*。以上六つものを挙げてみたが、そのようなあらゆる特徴づけからは、文献学が何であるか、あるいは何であるべきかを認識することはできず、むしろ文献学者においては、みずから自身の研究について熟考することがいかに甚だしく欠如しているか、ということが認識できるだけである。

以上のような批判を行ったのち、わたしが最終的に自分なりに文献学を説明するために、どこに活路を見出し得るかということは、もちろん非常に問題的といわざるを得ない。だが正しい見解に到達するためには、通常の説明をその一面性から解放しなければならない。そもそも学問は、ただただ分割されない一つのものであり、しかもそれと一緒に生と人間活動との理念的側面を形づくる技術 (Kunst) とは異なって、宇宙の概念的認識を任務としている。全体としての総体的な学問は、理念の学問たる哲学である。しかし全体が物質的側面から受け取られるか、あるいは理念的側面から受け取られるか、自然としてかあるいは精神としてか、必然性としてかあるいは自由としてか、という考察の仕方に応じて、形式的諸学科は別にして、われわれが物理学 (Physik) と倫理学 (Ethik) と名づける、二つの学問が生じる。さて、文献学はいずれに属するであろうか。文献学はある程度両者を包括するが、両者のいずれでもない。われわれは文献学者としてプラトンのように哲学をするべきではないが、しかしプラトンの書物を理解すべきである。しかも形式を顧慮して芸術作品としてだけはな

* 1819年のラテン語の演説「完全な人間性へと形成されるべき人間について」(De homine ad humanitatem perfectam conformando) (『小品集』第一巻 69頁以下)と1822年の演説「古代の研究について」(De antiquitatis studio) (『小品集』第一巻 101頁以下)を参照のこと。

く、内容も顧慮して全体的に理解すべきである。なぜなら、説明というものはやはり本質的に文献学的であるが、それは内容の理解にも、しかもとりわけ内容の理解に、関係するからである。文献学者は、プラトンのティマイオスのような自然哲学的な作品¹²を、イソップの寓話やあるいはギリシア悲劇とまったく同じように、理解する (verstehen) ことと説明する (erklären) ことができないからである¹³。自然哲学を生み出す (produzieren) ことは、文献学者の課題ではない。しかしこの学問のなかで生み出されているものを知って理解することは、自然哲学の歴史が文献学的に加工されなければならない以上、文献学者の課題である。同一のことは、その

¹² プラトン後期の著作である『ティマイオス』(Τίμαιος, Timaeus) は、後世「自然について」という副題がつけられたことからわかるように、この世界の森羅万象がいかにして生じたかを論じた宇宙論ないし宇宙開闢論である。そこにはアトランティス伝説、造物神デーミウルゴス(δημιουργός)による世界の創造、元素(ῥιζώματα)、医学などについて記されている。この作品はプラトンの数多くの著作のなかでも、自然を論じた書物としては唯一のものであり、神話的な説話を多く含んでいるが、後世に与えた影響はきわめて大きい。

¹³ ベークもその博士論文審査に関与したところの W・ディルタイは、周知の通り、「理解」(Verstehen)と「説明」(Erklären)を根本的に区別し、前者を精神科学の、後者を自然科学の認識方式と見なしたが、この事例が示しているように、ベークにおいてはまだそこまでの明確な方法論的な区別は存在しない。しかしベークとディルタイの間に介在する歴史家のドロイゼン (Johann Gustav Droysen, 1808-1884) は、「人間の思惟の対象ならびに性質にしたがって、(哲学的ないし神学的)思弁的方法、物理的方法、歴史的方法という三つの可能的な学問の方法がある」と言い、それぞれの方法の本質を「認識すること、説明すること、理解すること」(zu erkennen, zu erklären, zu verstehen)としている。したがって、ディルタイのテーゼはドロイゼンに遡るものと見なすことができる。Cf. Johann Gustav Droysen, *Historik. Rekonstruktion der ersten vollständigen Fassung der Vorlesungen (1857) Grundriß der Historik in der ersten handschriftlichen (1857/1858) und in der letzten gedruckten Fassung (1882)*, Textausgabe von Peter Leyh (Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 1997), S. 424.

歴史的発展が同様に文献学的に探究される、倫理学全体にもあてはまる。しかし物理学と倫理学の個々の分野もまた、文献学によってそのように加工される。例えば、自然史と政治学がそうである。物理学的思弁や実験は、もちろん文献学の課題ではない。それは論理的調査やあるいは政治的調査が文献学の課題ではないのと同じである。しかしプリーニウス [Gaius Plinius Secundus, 23(24)-79. 大プリニウス。ローマの将軍・官吏。ローマ] やディオスコリデス [Dioskorides. 1世紀のローマの植物学者。薬草その他の植物について記した] やビュフオン [Georges Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-1788. フランスの博物学者・哲学者。生物進化の観念を提起。主著「博物誌」, 「文体論」] のような人の作品は文献学の対象である。行為することと生み出すこと, 政治学と芸術理論はこれに関わっているが, 文献学者には何の関わりもない。しかしかの理論によって生み出されたものを認識することは, 文献学者に関わりをもっている。これにしたがえば, 文献学の本来的な課題は, 人間精神によって生み出されたもの, すなわち, 認識されたものを認識すること (das Erkennen des vom menschlichen Geist Producirten, d.h. des Erkannten) であるように思われる¹⁴。所与の

¹⁴ 「人間精神によって生み出されたもの, すなわち, 認識されたものを認識すること」 (das Erkennen des vom menschlichen Geist Producirten, d.h. des Erkannten), あるいはよりコンパクトな「認識されたものの認識」 (Erkenntnis des Erkannten) という, バークのこの有名な定式は, バーク自身は明言していないものの, ヘロドトスの『歴史』第七巻 152, 3 に, その先蹤となる事例を有している。「歴史学の父」と称されるヘロドトスは, 上記の箇所において, 「わたしの義務とするところは, 伝えられているままを伝えることにあるが, それを全面的に信ずる義務が私にあるわけではない。わたしのこの主張は本書の全体にわたって適用さるべきものである」と述べている (ヘロドトス著, 松平千秋訳『歴史』下巻 [岩波書店, 2007年], 113頁)。この引用句の前半部分をギリシア語の原文で示すと, “Εγὼ δὲ ὀφείλω λέγειν τὰ λεγόμενα, πείθεσθαι γὰρ μὲν οὐ παντάπασιν ὁ φείλω” となるが, ここに出てくる “λέγειν τὰ λεγόμενα” という表現 — これは「述べられたものを述べる」, 「伝承されているものを伝承する」というほどの意味である — は, そのラテン語版ともいうべき “relata refero” という表現とともに, 「認識されたものの認識」というバークの定式とピッタリ重なり合う。Cf. *Veni vidi vici. Geflügelte*

知識は文献学によっていたるところで前提され、文献学はこれを再認識しなければならない。あらゆる学問の歴史はそれゆえ文献学的である。だがこれによって文献学の概念が汲み尽くされているわけではなく、むしろ文献学の概念は最広義の歴史学の概念と重なり合う。歴史学と文献学は、一般的な見解にしたがえば、密接な類縁関係にある。これについては、デーダーライン [Johann Christoph Wilhelm Ludwig Döderlein, 1791-1863. フ] [イッツの文献学者。ベルリン、エアラフゲン大学の教授を歴任。] の『文献学と歴史学の間
に存在する親近性について』 *De cognatione, quae intercedit philologiae cum hisotria* (Berlin, 1816) を参照されたい。ところで、もし歴史学と文献学を分離しようとするのであれば、後者には対象として認識された歴史を、すなわち——伝承は一つの認識ではあるが、生起した事象の叙述ではないかぎり——生起した事象についての伝承の復原を、割り当てなければならないであろう。その場合、歴史記述は文献学の目的ではなく、歴史記述の中に書き記された歴史認識を再認識することのみが、したがって歴史記述の歴史のみが、文献学の目的である。しかしそのような分離は実行され得ない。まずすべての歴史記述は資料に基づいているかぎり、次に歴史的行為そのものが一つの認識であるかぎり、すなわち、歴史的行為は歴史研究者が再認識しなければならない理念を含んでいるかぎり、むしろすべての歴史記述は文献学的なやり方をする。歴史的に生み出されたものは、行為へと移行した精神的なものである。歴史学はそれゆえ文献学から見かけ上、つまりその範囲に関して、異なっているにすぎない。なぜなら、前者は通常その主要事項にしたがえば政治的なものに限定され、爾余の文化生活を国家生活に結びつけて考察するからである。けれども文法学ですら歴史学的である。それは一つの民族の歴史的に生成した言語体系を、その発展全体において、あるいはその一定の段階において、叙述する。あらゆる恣意的かつ経験的に設定された制約を取り除き、考察に最高の普遍性

Worte aus dem Griechischen und Lateinischen. Ausgewählt und erläutert von Klaus Bartels (Deutscher Taschenbuch Verlag, 2003), S. 20, 155.

を与えることによって、文献学的な活動の本質そのものに注目するとすれば、文献学は——あるいは同一のことが言えるが——、歴史学は認識されたものの認識 (Erkenntniss des Erkannten) である。その場合、認識されたもののなかにはあらゆる表象も含まれている。なぜなら、例えば、詩歌や、芸術や、政治史において再認識されるのは、しばしばいろいろな表象のみだからである。そこにおいては、学問におけるように概念が書き記されることは部分的にすぎず、それ以外は表象が書き記されているが、文献学者はこうした表象を再認識しなければならない。かくして文献学においては、いたるところで所与の認識が前提されるので、文献学は伝達なしには存在することができない。人間精神はあらゆる種類のしるしと象徴において自己を伝達するが、それを認識して表現する最も適切なものは言語である。語られた、あるいは書き記された言葉を探究することは——文献学という名称が述べるように——、最も原初的な文献学的な衝動であって、その普遍性と必然性は、伝達なしには学問一般と生すらもがまずい助言を受けることになるので、そこからしてもすでに明白である。したがって、文献学は実際に生の第一条件の一つであり、最深の人間本性と文化の連鎖の中に本源的なものとして見いだされる、一つの要素なのである。文献学は教養ある民族の根本衝動に基づいている。教養のない民族もフィロソフェイン (φιλοσοφείν) [知を愛し求めること、哲学すること] はできるが、フィロロゲイン (φιλολογείν) [学問を愛すること、文献学を営むこと] はできない¹⁵。

文献学的な活動の本質を規定することを通して、われわれは一面的な概念を遠ざけてきた。そこで残っていることは、かかる一面的な概念がいかにして成立したのかを示すことだけである。しかしそれらはわれわれが提

¹⁵ φιλοσοφείν ならびに φιλολογείν の訳語に関しては、実際のところかなり悩ましい。英語で言えば、φιλοσοφείν は本来 love knowledge, pursue knowledge, φιλολογείν は love learning, pursue learning ほどの意味であるが、両者の類似と相違がわかるように綺麗な日本語に置き換えるのは不可能に近い。

起した概念を構成する個々の契機への限定ということから容易に説明され得る。認識の最も普遍的な手段、あるいはむしろ単に理解の手段にとつてのみならず、あらゆる認識活動にとつての純粋な複写は言語であるので、言語の神秘を究明することが文献学の第一の課題となる。なぜなら、言語をその自由と必然性においてその究極の基礎にまで掘り下げて捉えることは、最高に評価できる課題であるが、実際に言語をその究極の基礎にまで掘り下げて捉えた人は、まさにそのことによってまたあらゆる人間的認識をも認識したことになるからである。けれども、認識の普遍的オルガノン〔オルガノンとはギリシア語の ὄργανον に由来し、道具とか機関の意。〕がまたあらゆる事柄に先立って認識されなければならない。そこからして、文献学を言語学として把握することは、当然のことであった。同様に、なぜ文献学そのものがその概念にしたがって一面的に古典古代に制限されたのかということ、われわれはいま理解する。こうしたことが起こったのは、近代は最初いまだに生産の過程に含まれており、したがってしっかりと締めくくることが全然できないからであり、それにまた近代についての考察も、手元に直接的に存在することによって、それほど必然的なものとして執拗に迫ってこないからである。古典古代はこれに対して、遠く離れ、疎遠で、不変的で、断片的であり、それゆえより高度の再構成を必要としている。生産が相対的に終了した後に、ギリシア人のもとで最初の有意義な文献学が成立した。というのは、アリストテレスとともに古い時代は終結し、そして非常に有能で強力であったアレクサンドリア派の文献学が、いまや目の前で終了した古典古代についての省察に着手したからである。ほかにもルネサンスの時代に、新しく成立しつつあった文献学がギリシアとローマの古典古代へと注意を向けていたが、それは当時としてはこれが唯一古典的 (klassisch) なものとして現れざるを得なかったからである。文献学が博識 (Polymathie) であるということは、その概念から必然性をもって生じている。それは実際いかなる対象にも限定されていないからである。フィロロギス (φιλόλογος) [話し好きな、議論好きな、学問好きな] という言葉が専門的に用いられて以来、すなわち、ギリシア人の間ではアレクサンドリア派のエラトステネス

[Eratosthenes 前 275 頃-194 頃。ギリシアの博学者。前 235 年頃、アレクサンドリアの図書館長に就任。天文・地理・数学・哲学・文法学等についての著述があり、また詩文も書いた。] 以来、ローマ人の間ではアテウス・フィロログス [Ateius Philologus. 1 世紀後半のローマの最も有名な文法家の一人。本名は Praxetastus. Philologus は彼の博識を示すために用いられたもの。] 以来、この側面が古典古代ではとりわけ浮かび上がってきた (スエトニウス [『名士伝』 *De Viris Illustribus* 所収の] 『文法家伝』 10¹⁶。グラフ「アテウス・フィロログスについて」 *De Ateio philologo*, 『ペテルスブルク・アカデミー報告』 *Bulletin der Petersburger Akad.* 第三巻, 1861 年, 121 頁以下)。エラトステネスとアテウスは、これ〔φιλόλογος のこと〕によって普遍的な学者を自称しようと欲したのであるが、それは特殊的な個々の学問の所有権を主張するのではなく、単に文法家や数学者等々でもなく、また哲学者でもなく、ロゴス (λόγος) の認識に、すなわちあらゆる現存の知識 (Kunde) に従事する学者のことであった。スエトニウス [Gaius Suetonius Tranquillus, 69-140 頃。ローマの文人。著作としては、ローマ皇帝の列伝『皇帝伝』 *De vita caesarum* と『名士伝』 *De viris illustribus* がよく知られている。] が述べているように、アテウスは自分をフィロログス (Philologus) と呼んだが、それは「彼が、この名を最初に要求したエラトステネスと同様、多種多様で雑多な教えによって評価されたからである」(quia sicut Eratosthenes, qui primus hoc cognomen sibi vindicavit, multiplici variaque doctrina censebatur)¹⁷。エラトステネスの場合には、当時の人々がいかに正しくこの名称を理解したかが明確に示される。彼は計り知れない学殖の持主で、大きな図書館の司書をしていたが、しかし仕事を手掛けたすべての分野のどの一つにおいても第一級の地位は確保せず、したがってペータ (成績 B) という綽名を

¹⁶ Cf. Suetonius, *De Viris Illustribus*, in *The Loeb Classical Library* 38 (London: William Heinemann Ltd., 1965), pp. 410-415.

¹⁷ 引用句を含む全文を J. C. Rolfe の英訳で引いておけば、以下のようになる。
“He [i.e., Ateius] seems to have assumed the title of Philologus, because like Eratosthenes, who was first to lay claim to that surname, he regarded himself as a man of wide and varied learning.” Suetonius, *De Grammaticis* 10, in *The Loeb Classical Library* 38 (London: William Heinemann Ltd., 1965), p. 413.

獲得した(『スイダス辞典』*Suidas Lexicon*¹⁸ 第一部, 850頁, キュスター [Ludolf Küster, 1670-1716. ドイツで生まれ、ケンブリッジで『スイダスの辞典』*Suidas Lexicon*を編集し、パリで没した文献学者。]と彼の注)。そこで博物館長は彼をそう[フィロログスと]呼んだのであった。各々の文献学者が、たしかに自分の専門では一番手であることはできるが、それ以外の個々の学問においては二番手、いわばベータであらざるを得ないということは、実際に文献学の概念に存している。かくしてアリストテレス以前の古典古代には、その時代は圧倒的に生産的であるので、本来の文献学者もいない。博学へと傾く傾向はさしあたり最も自然なものであったが、ただそれにもかかわらず、考察の仕方はあまりに経験的であり、またあまりにも無批判的なものにとどまっていた。文学(Literatur)においては、素材と形式はある程度統一されているように思われるので、言語学と博学はここでそれなりに考慮された。しかし文献学が文学の知識として把握されたとき、文法学と事柄の知識は協調的なものと見なされ、かくして厳密に受け取られて、文献学から排除された。文学は文献学の本源ではあるが、にもかかわらずそれは唯一の認識を含むものではなく、かかる認識は国家、芸術、学問等々のなかにも存している。しかしまさに文献学は認識されたものの認識に基づいており、そして民族の認識はとりわけその文学に表現されているので、文学史が一面的に文献学全体であると受け取られたことは、容易に説明される。批判が不遜にも文献学を名乗ることができたことも、容易に理解できる。というのは、実に認識されたものを認識する際に、批判はつねに活動し、頭脳は発明の才に対して優位を保持し、想像力は撃退されなければならないからである。文献学が慎重かつ勤勉そのもののバタヴィ人 [Vataver. [lat.] Batavi. 西ゲルマン]

¹⁸ スイダス(Suidas; Soudidas; Soudas)は、最も重要なギリシア語の辞典ないし百科事典と見なされている *Suidas lexicon*の著者であるが、彼が10世紀中頃にコンスタンティノーブルで生きていたことと、おそらく文学的研究に没頭していた教会人であったことを除けば、彼自身については何も知られていない。しかし彼が書き著した *lexicon*は、ギリシアの文献学、文法、ならびに文学史に関する、最も価値のある歴史的資料である。

の種族。ローマの文献学者・博学者のヒギニウス]の冷たい頭脳に委ねられたとき、とくにこのことが表面化した。しかし彼らの一面性ゆえに、批判は専制的に支配することはない。なぜなら、文献学は人間全体を要求すべきであり、人間のあらゆる能力を多面的に発展させるべきだからである。それゆえ、この見解の正反対も、つまり文献学は人間性の研究 (Humanitätsstudium) であるという見解も、同じように文献学に属している。理性の形成、すなわち道徳性と美的・思弁的認識との形成は、人間性に属している。そして人間性が認識したものを認識することは、人間を知悉することによって、すなわち人間精神をそのあらゆる生産活動において知ることによって、とりわけこの目標へと導かれる。しかし批判がこの高次の努力によって生気を与えられて、人間性そのものをはじめて純化し、味気なさや平凡から、奇矯、空しい空想、そして自己欺瞞から、それを守るということは、まさに人間性に属している。かくしてわれわれは、以上に述べたすべての概念が、その一面性から取り出されて平和的な契りを結びつつ、文献学の概念のなかに入ってくるのを見るのである。

§ 2. ところで、われわれの定義にしたがえば、文献学は何か余分なものに思われまいであらうか。つまり、《すでになされたことをなす》(actum agere)、《すでに判決されたものを判決する》(judicatum judicare) ことではなかろうか。それは生み出されたものを知ろうとするにすぎないので、全く何も生み出さないように思われる。トリストラム・シャンディ [イギリス作家ローレンス・スターン (Lawrence Sterne, 1713-1768) の小説『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* の主人公。] は文献学者に次のように話しかける。「学者の方々にお伺いを立てますが、われわれは未来永劫に、書いたものの嵩^{かさ}だけはどんどん積み上げて行くものなのでしょうか——実質的な中身は一向ふえないのに？ ちょうど薬屋商売の者が、ただこちらの器^{うつわ}からあちらの器に移すだけで、つぎつぎと新しい製剤をでっち上げるように、われわれもそのやり方で未来永劫に新しい著作をでっち上げて行くのでしょうか？ われわれはたった一つの同じ綱を、未来永劫によじったりまたよじれをもどしたりしつづけるさだめなののでしょうか——

未来永劫に同じ道を — 未来永劫に同じ速度で？ われわれは本当に永遠のいやはての日までも、働くべき日も休みの日も同じように、ちょうど修道僧たちが聖者の遺品を人に見せびらかすのと同じように — 一つ — たった一つの奇蹟をすらそれらの品で行なうこともなく、学問の遺品を見せびらかしつづける運命を負わされているのでしょうか？」¹⁹ と。このことは肝に銘ぜられるべきであろうが、しかしそれは個々のものの伝統のみを目当てにする悪しき文献学者にしか当てはまらない。実際には文献はより高次の目的をもっている。その目的は全認識とその部分を歴史的に構成することのうちに、またかかる認識のうちに表現されている理念を認識することのうちに存している。ここには純粹に生産しているとの思い違いをしている少なからぬ哲学におけるよりも、再生産という仕方での生産 (Production in der Reproduction) がより多くある。文献学においても生産能力はまさに大事なことであり、これなしには何一つ真に再生産できないし、

¹⁹ この引用は、バークのドイツ語テキストから自分で翻訳したものではなく、英語の原典に基づく朱牟田夏雄訳を借用している。『筑摩世界文學大系 21 リチャードソン・スターン』(筑摩書房、1972年)所収の、「紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見」第五卷、第一章、491頁。なお、参考までに当該箇所を英語の原文で、以下に示しておく。

“Tell me, ye learned, shall we for ever be adding so much to the *bulk* — so little to the *stock*?

Shall we for ever make new books, as apothecaries make new mixtures, by pouring only out of one vessel into another?

Are we for ever to be twisting, and untwisting the same rope? for ever in the same track — for ever at the same pace?

Shall we be destined to the days of eternity, on holy-days, as well as working-days, to be shewing the *relics of learning*, as monks do the *relics of their saints* — without working one — one single miracle with them?”

Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, vol. 5 (London: T. Becket and P. A. Dehont, 1761), p. 3.

再生産が学問的資本の大きな進歩であり真の増大であることは、すでに経験が示すところである。認識されたものを再認識して純粋に表現すること、時代の間違いや誤解を取り除くこと、全体としては現れていないところのものを全体へと統一すること、これらのことはすべておそらく《すでになされたことをなす》(actum agere) ことではなく、むしろ最高に本質的な何かであって、それなしにはすべての学問はただちに終焉に達するであろう。各々の学問においては、文献学的な才能すらもなければならぬ。その才能が終息するところでは、無知が登場してくる。文献学的な才能は理解(Verstehen)の源であるが、理解することはそんなに容易い事柄ではない。

だがしかし、もしわれわれが文献学の本質を全く無制限に、認識されたものの認識(das Erkennen des Erkannten)に指定すれば、これは全面的には不可能なことであるように思われる。あらゆる制約を放棄した後に、その概念を実行することはいかなる種類の人間精神にも到達不可能と思われる。しかし文献学は、実行する上でのこうした制約性を、ある程度包括的ないかなる学問とも、例えば〔そうした制約性〕にもかかわらず一つの学問として認知されている自然科学とも、共有している。学問の本質はまさに無限性に存している。素材が完全に限定されているところのみ、〔目標に〕到達することは可能であるが、その場合ですら、〔実際には〕到達はほとんど可能ではない。無限性が終息するところでは、学問は終焉に達する。それにもかかわらず、到達不可能性はいわば長さと広さの面での拡張においてのみ起こる。ここでは無限の連続が与えられている。学問は深みの次元において完全に把握され得る。ひとは個別的なものに非常に深く沈潜できるので、マイクロコスモスにおいて全体を把握するように、個別的なものにおいてマクロコスモスを把握する。全体はあらゆる個々の理念において到達される。しかしすべての理念を包括できる人は誰もいない。哲学においてと同様、文献学においてもこのことは名称のなかにすら表現されている。ピタゴラスは、それがソフィア(σοφία)〔知, 知恵〕を得ようとする努力にすぎないという理由で、まさにフィロソフィア(φιλοσοφία)〔知

を愛し求めること、哲学] という名称を考え出したと言われている。なぜなら、ソフィア (σοφία) をすでに完全にもっている人は、《哲学的探究をする》(philosophiren) ことをやめるからである。だが、これによって得ようと努力することはやんでしまおうだろうという理由で、フィロソフィア (φιλοσοφία) はソフィア (σοφία) [知, 知恵] になるはずだ、というのはおそらく完全には正しくない。同様に、文献学はロゴス (λόγος) を完全には決してもっていない。それは、ロゴスを得ようと努力することを通して、フィロロギア (φιλολογία) なのである。かくしてそれはまた、フィロマテイア (φιλομάθεια) [学問を愛すること, 学識ないし知識への愛] とも呼ばれてきた (ヴィッテンバッハ [Daniel Albert Wittenbach, 1746-1820, ドイツ系] 『雑録集』 *Miscellanea doctrina* 第一巻への序言, アムステルダム, 1809年)。学問は、それが実現されているかぎり、そのすべての広がりにしたがって、その担い手の全体においてのみ、つまり幾千もの頭脳において、部分的に細切れになり、粉碎され、おそらくまたずれたりくずれたりした状態で存在する。しかし非常に多くの人々が学問に抱いてきたそのような大きな愛は、すでに次のような理念の実在性を保証する。その理念とは、人間精神が構築したものをその全体において再構築することにほかならない。そのような課題はまた統一的な力によっていかに解決され得るであろうか。ベントリ [Richard Bentley, 1662-1742, イギリスの古典学]、ヘムステルホイス [Tiberius Hemsterhuys, 1685-1766, オランダの古典学の発展に大きく寄与した。]、ヴィンケルマン [Johann Joachim Winckelmann, 1717-1768, ドイツの美術史家・美学者。古代美術史研究の創始者。] といったような人が、それについて解決するところがいかに少なかっただろうか。書物においてというよりもむしろ人生において。というのは、これらの人々は素材を与えるだけで、形式の完成した姿は背景に留まっているからである。文献学は、あらゆる学問と同様、近似値 [問題の近似的解決] を得ようとする無限の課題である。われわれは文献学においてつねに一面的に収集するであろうし、思弁との統一を決して全面的に実現しないであろう。なぜなら、ひとはまた一面的に思弁するであろうから。しかし未完成は決して欠陥ではない。ひとがそれを自分自身や他者に対して秘密にするときに、はじめてそれは真の欠陥となるのである。*

§ 3. 文献学の概念と外延は、それと爾余の学問との関係が正しく把握されるときに、はじめて完全に明確に認識される。文献学がその目標にしたがって手元に存在するすべての人間的知識の再認識と叙述であるとするれば、文献学は、この知識が哲学に根ざしているかぎり、精神の認識に関しては哲学と協調しており、ただその認識の仕方によってのみ哲学から区別される。すなわち、哲学は原初的に認識する、つまりギグノースケイ (γινώσκει) [知る, 認識する] であるが、文献学は再び認識する、つまりアナギグノースケイ (ἀναγινώσκει) [再び知る, 再認識する] である。これこそはギリシア語において《読むこと》(Lesen) の意味を正当に保持してきた言葉である。というのは、読むことは抜きんでて文献学的な活動であり、読もうとする衝動は文献学的な衝動の最初の表現だからである。このような再認識は、プラトンが『メノン』において述べているように²⁰、本来的なマンタネイン (μανθάνειν) [学ぶ]、つまり《創り出すこと》とは違って《学ぶこ

* 1850年の第11回文献学者集会の開会演説(『小品集』第二巻, 189頁以下), A・キルヒホーフ氏をベルリン科学アカデミーの新入会員として歓迎するための演説(1860年)(『小品集』第三巻, 43頁以下), ならびに1829年のベルリン講義目録へのプロオイミオン「哲学の原初における驚嘆について」(Demiratione philosophiae initio)(『小品集』第四巻, 322頁以下)を参照のこと。

²⁰『メノン』81 C-D。「……魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何ひとつとしてないのである。だから、徳についても、その他いろいろの事柄についても、いやしくも以前にもまた知っていたところのものである以上、魂がそれらのものを想起することができるのは、何も不思議なことではない。なぜなら、事物の本性というものは、すべて互いに親近なつながりをもっていて、しかも魂はあらゆるものをすでに学んでしまっているのだから、もし人が勇気をもち、探求に倦むことがなければ、ある一つのことを想起したこと——このことを人間たちは「学ぶ」と呼んでいるわけだが——その想起がきっかけとなって、おのずから他のすべてのものを発見するということも、充分ありうるもだ。それはつまり、探求するとか学ぶとかいうことは、じつは全体として、想起することにほかならないからだ。』『プラトン全集』第9

と》である。そして学ばれるところのものはロゴス (λογός), つまり与えられた知識 (Kunde) である。かくしてフィロロゴス (φιλόλογος) とフィロソφος (φιλόσοφος) は, 素材におけるのではなく, 見解と理解における対立である。けれどもこの対立は絶対的なものではない。というのも, あらゆる認識, つまりあらゆるグノーシス (γνώσις) [知識] は, プラトンの深い洞察にしたがえば, より高次の思弁の見地から見るとアナグノーシス (ἀνάγνωσις) [再知識] だからであり, そして文献学は, 哲学が正反対の手続きから到達するものへと, 再構成的に到達しなければならないからである。文献学と哲学は相互に制約し合っている。なぜなら, ひとはおよそ認識することなしには, 認識されたものを認識することができず, そしてまた他者が認識したところのものを知るることなしには, 端的に認識へと到達することができないからである。哲学は概念から出発し, 文献学は, 哲学的対象の半分 (残り半分は自然である) をなす, その素材を取り扱うに際して, 偶然的に手元に存在するものから出発する。さて, 哲学が概念から出発してあらゆる所与の歴史的状况に含まれている本質的なものを構成しようとするならば, それは歴史的现象の内的内実を把握しなければならない。だがそのためには, その本質的なもののまさに外的表現であるところの, こうした現象についての知識が無条件的に必要である。例えば, ギリシア民族がその偶然的な諸現象において知られていなければ, 哲学はこの民族の精神を構成することができない。このために必要なのは, 伝承されたものを正しく再生産することであるが, これは純粋に文献学的であって, 哲学によってあまりにも容易に間違えられるものである。さらに哲学は, 諸現象に含まれる本質的なものを指し示すためには, かかる諸現象を終点としなければならない。つまり, 哲学が文献学を必要とするということは明白である。かくしてアリストテレスは『国制誌』 *Politiien*

卷, 加来彰俊・藤沢令夫訳『ゴルギアス・メノン』(岩波書店, 1974年), 278頁。

[「アリストテレスがギリシアのボリスのほか異民族を含む、158 篇の『国制誌』 *πολιτεία*] を彼の哲学的探究の歴史的な、つまりは文献学的な基礎として書き記したのであった。しかし逆に、文献学も哲学を必要とする。文献学は歴史的に構成するのであって、概念から構成することはしない。けれども、文献学の究極的な最終目標は、概念が歴史的なものにおいて現れ出ることである。文献学は構成作業における哲学的活動なしには、ある民族の認識の全体を再生産することができない。それゆえ、文献学は哲学のなかへみずからを解消する。実際、もしそれへと向かう方向性があらかじめ決まっていなければ、およそ概念は歴史的なものなかに認識され得ないように思われる。アリストテレスが彼の政治学の基礎として、いろいろな国制についての文献学的な研究を必要としたとすれば、文献学者はふたたび歴史的研究を行う際の導きの糸として、アリストテレスが『国制誌』において与えたような、政治・哲学的な概念を必要とする。歴史的素材が、したがってまた文献学そのものが、決して単なる集合体であるべきでないとすれば、あらゆる学科においてそうであるように、素材は概念によって消化されなければならない。したがって、文献学もふたたび哲学的概念を前提とし、同時にそれを生み出そうと欲する。しかしこのことは自然科学においても同様である。自然科学は経験的に考察する学問として、哲学のもう一つの側面に対して、文献学の倫理学に対するのと完全に同じ関係を有している。一方の他方への解消ということが起こる。経験的研究と哲学的研究が正反対の行程を歩み、他方が始まるところで一方が終わるとすれば、乗法と除法のように、一方は他方を吟味するものである。哲学と文献学との一致点は、たしかにいたるところに見いだされるが、しかしとりわけ歴史の哲学と哲学の歴史は、次のように評価されるべきである。すなわち、歴史の哲学は文献学に最も類縁的である哲学的な学問であり、そして文献学はその最高の見地においてみずから自身をこのなかへ解消する。これに対して、哲学の歴史は文献学的な学問であり、哲学は次のような仕方でのこの学問のなかへと移行する。すなわち、哲学は歴史的に辿ってきたおのが行程を突き抜けて、文献学的な道の上でのみ可能なものを、最大の普遍性において最高度にアプリアリに構成する

ところまで進むことによってである。*

あらゆる爾余の諸科学は哲学と文献学とに根ざしている。なぜなら、これらの諸科学は一方では哲学を特殊な仕方で個別的目的に適用したものと見なされるだけか、あるいはそれらが純粋に理論的であるかぎり、哲学の分岐したものと見なされるだけだからである。しかし他方では、これら諸科学はみずからの歴史にその対象を有している。医学のすべての歴史、法学のすべての歴史的考察（それなしには例の諸科学の基本的伝達は不可能である）、そして神学の大部分は、文献学的な性質をもっている。とはいえ、文献学そのものにおける認識されたものの認識と、文献学以外のあらゆる特殊科学において生起するそれとの間の相違は、相変わらず存在している。なるほど活動のうちにはないが、しかし目的のうちにはである。文献学の目的は純粋に歴史的である。それは認識されたものの認識をみずから自身に対して客観的に立てる。これに対して、例の個別的諸科学や哲学そのものにおいて、ひとはまた認識されたものを認識するが、しかしそれはその上にさらに構築するためである。例えば、自然科学者は、自分がその上に基礎づける新しい成果を得るために、他の人々の研究を活用する。後者は文献学には何の関係もない。文献学の成果は即自的に歴史的なものそのものである。にもかかわらず、哲学がつねにあらゆる特殊の諸科学を必然的に総括しなければならないように、文献学もそのすべての素材を特殊の諸科学から受け取らなければならない。そしてこれら特殊の諸科学なしには、文献学も全く存在しないのであるから、文献学はまたこれら諸科学と相互的に制約し合う。個別的諸科学が文献学的な活動を必要とするように、認識全体の再構成としての文献学もまた、認識のあらゆる個々の部分の認識を、したがってその分野があ全体の形作るところの、個別諸科学の認識

* 1853年の演説「学問、とりわけ実践的ならびに実証的なものに対するその関係について」(Ueber die Wissenschaft, insbesondere ihr Verhältniss zum Praktischen und Positiven) (『小品集』第二巻, 83頁以下)。

を要求する。法学者は、批判と説明とを通じて資料を認識するために、文献学を必要とする。しかし文献学者は、ある民族の法的諸関係を再構成するために、それどころか言語をすら理解するために、法概念を必要とする。文献学は自然科学の成果を知ることなしには、ある民族の文化の大部分を理解しないであろう。* O・フリック「文献学と自然科学」、『プロイセン年報』(1861年)参照。

さて、文献学がその対象において、たしかに哲学ならびに特殊的諸科学と落ち合うように思われる以上、こうした考えにしたがえば、文献学が特有の知識を有しているのかどうかは疑わしい。世人の言うところでは、学識ある人というのは、他の人々が知っていたことを沢山知っている人、沢山の書を読み、沢山の抜粋を作り、最高度に多くのものを保持している人のことである。文献学者はこの範疇のなかに位置している。沢山保持している者もあれば、わずかしか保持していない者もあるが、しかし彼らは沢山抜粋する。よりいっそう疑わしい状態にあるのは、次のように考える人々の場合である。すなわち、知識一般が、それゆえにまた他の人々が知っていたことについての知識が、文献学者をつくるのではなく、解釈と批判の技術のみが、すなわち他人の知識を認識するための手段の行使のみが、つねに文献学である、と考える人々の場合である。こうした人々は、そのことによって他人の知識を知ることをみずから放棄し、そして文献学上の独自の知識をもたないのであるから—— なんとすれば、かの手段の行使は無意味なものだからである——、彼らはそれゆえ全く何も持たない。たとえ文献学に一つの知識が帰されるとしても、単なる学殖という概念がそれに適用されるかぎり、われわれ自身の申し立てにしたがえば、それは他人の知識にすぎない。他人の認識について思考するということは、依然として欠

* 1826年のラテン語の演説「哲学ならびに歴史学とその他の学科との連結について」(De philosophiae et historiae cum ceteris disciplines conjunctione) (『小品集』第一巻、140頁以下)参照。さらに1850年の第11回ドイツ文献学者集会の開会演説(『小品集』第二巻、191頁以下)を参照のこと。

如しており、そして修正的な批判といえども他人の認識を純粹に修復しようとするにすぎない以上、かかる修正的な批判においてすらそれはまだ存在しない。だが文献学は、もしその目標が理念についての認識であるべきだとすれば、みずからの思考を一切放棄しない。なぜなら、他人の理念はわたしにとって理念ではないからである。それゆえ、まずもって掲げられるべき要求はこれである。すなわち、他人のものを自分のものになりつつあるものとして再生産すること。それは外的なものにとどまらず、それによってまさに文献学の寄せ集めの状態も止揚されるようになるためである。しかし同時にまた、この再生産されたものを超越していること。それは自分のものになったにもかかわらず、ふたたびそれを客観的に対向するものとしてもち、そしてこの一つの全体へと形づくられた、認識されたものの認識について、一つの認識をもつためである。このことは次に、以下のことへと導かれることになる。すなわち、みずから自身の思考のなかでこの認識に然るべき場所を割り当てること、そしておよそ評価によって生起するものと、認識されたものとを同じ段階に置くことである。所与についてのあらゆる思考が判断であるように、文献学者の思考は修復する批判のうちではなく、このような評価のうちに存している。したがって、文献学はたしかに特有の知識であり、そしてこれがあらゆる爾余の知識と相互に制約し合っているということは、まさにそれが他の諸科学と並列しているということを証明している。

ところで、もしすべての特殊的諸科学が哲学の下位に位置づけられているように思われるとすれば、そしてそれにもかかわらず、われわれが自然科学を哲学に対して、文献学と同じ関係に置いたとすれば、この点に矛盾が存しているように思われる。なぜなら、その場合には、文献学は哲学と並列しているのではなく、それに従属していなければならないからである。しかし自然科学は、もしそれが文献学と同じように、経験的かつ歴史的に構成するものであれば、そして哲学が自然に関係するかぎりは、まさに哲学の裏面であるにすぎない。そして自然科学は、われわれが文献学について見出したほどには、哲学の下位に位置づけられてはいない。つまり文献

学が下位に位置づけられているのは、哲学がふたたび下位に位置づけられるように思われるようなやり方であって、その点にまさに並列関係がある。文献学の独立した立場によってのみ、— 後ほど示されるように — 文献学の概念からその部分を完全に構成することと、同一の概念から方法を直接に生じさせることが可能となるのである。

§ 4. あらゆる恣意的な規定を遠ざけ、この学問の本来的な本質を見出すためには、まず文献学についての限定されない概念を確立することが必要であった。しかしその概念が限定されていないほど、実行する上での限定はますます多く提供されている。必要な概念は、あれやこれやの学者によって実行される際の外延に対して、さしあたり恣意的な限界を保持することができる。例の概念は絶対的なものであり、実行される際の外延は相対的なものである。かくして相対的な限定は、分野にしたがっても、例えば言語の文献学、文学の文献学、等々と、設定され得る。そのような分解は必然的であるとはいえ、これによってひとはその概念そのものの諸部分を相互に引き裂くことになる。もう一つ別の限定は、その概念が時間と空間にしたがって現象化する、外的な現象形態にのみ関係する。つまりひとが相対的に閉じられた時代や、あるいは民族のみを考察の対象にするときがそうである。かくして古代の文献学と近代の文献学、東洋の文献学あるいは西洋の文献学、ローマの文献学、ギリシアの文献学、インドの文献学、ヘブライの文献学、等々が得られる。そのような区分は文献学の本質によりふさわしい。ライヒャルト [Hans Reichardt, テュー
ヒンゲンの神学寮の司書。] (『文献学の区分』²¹, 69 頁) は、古代に関して非常に正当にもこう述べている。「古典古代学は、文学史でも、芸術史でも、宗教史、等々でもなく — そのような歴史は、文献学がなくてもすでにある —、あらゆるこれらの契機の相互浸透と共

²¹ Hans Reichardt, *Die Gliederung der Philologie*, Tübingen 1846. なお、ベークはライヒャルトのこの書を「卓越した書物」として高く評価し、後段においても何度か言及している (e.g., 原典 67, 77 頁)。

同作用からなる民族の生活史である」。各々の特殊科学は、歴史的に叙述される時、一つの発展の線において延びている。文献学はこうした諸々の線を悉く一つの束に総括し、そしてそれらを中心点たる民族精神から、円の半径のごとくに解析する。

まさに古典古代に自己を限定することがいかに自然なことであるかは、上(12頁〔翻訳22頁〕)に示した通りである。それ以外に、古典的なものはとりわけ知る価値があり、またギリシア人とローマ人の文化はわれわれの全教養の基礎であるので、古典的古代についての文献学はふたたび事柄の本質に即した部門を形づくる。さて、われわれは文献学の爾余の分枝が同等の権利を有することをはっきりと認めつつ、以下の考察を古典的古代に限定することを、しかも限定の意識をもって受け入れる。かかる限定は外的根拠から正当化されるが、それ自体としては偶然的なものである。しかしその限定の内部において、われわれは無限定な概念に従う。方法と構成とはかかる概念からのみ生じるからである。

§5. 文献学的な研究の概念と外延が確定されたあとで、われわれはその目的を調べなければならない。けれども、まずこの研究に付されたさまざまな名称を考察することが得策であろう。というのは、こうした名称は、人々がその研究のもとでこれまで追求してきた諸努力について、解明を与えるからである。文献学の名称については、わたしはすでに上で、そこから概念の諸関係を基礎づけるために、あらかじめ若干のことを語らなければならなかった。フィロロギス(φιλολόγος)〔文献学者〕— フィロロギス(φιλολόγος)〔言語学者〕ではなく— とフィロロギア(φιλολογία)〔文献学〕という言葉は、まずプラトンに見出される。彼はそれをまだ専門的な意味で用いていないが、しかし事柄に即して考えれば、エラトステネスにおいて専門的な表現のなかに見出されるものと同一のことがすでに意味されている。すなわち、言語学(Sprachkunde)ではなく、認識されたものの認識であるところの、知識一般を獲得しようとする努力のことである。ロゴス(λόγος)というのはまさに知識(Kunde)、とりわけ伝統によって獲

得された知識であり、これは本来真に文献学的な知識であって、その主要な源泉は文学である。そこからロゴグラフィ (λογογράφου) [散文作家] やロギオイ (λόγιου) [物語り手, 年代記作者] は、アオイドイ (ἄοιδοί) [歌い手] やあるいはポイエータイ (ποιηταί) [詩人] と異なって、早期から知識の伝承者を意味していた。後者は歴史的伝統ではなく、神話を取り扱い、歴史的にではなく詩的に造形する者たちで、本来的な意味でのソフィア (σοφία) [知, 知恵] とは異なっていた。プラトンは、『パイドロス』236 E²², 『ラケス』188 C²³, 『テアエテトス』161 A²⁴, 『国家』九卷 582 E²⁵ において、学問的伝達への欲求ならびに学問的伝達の喜びについて、フィロロゴス (φιλόλογος) とフィロロギア (φιλολογία) を用いている。プラトンにおいては (『法律』第一卷 641 E²⁶), アテナイ人がフィロロゴイ

²² 『パイドロス』236 E。「ソクラテス まいった！ ひどい男だ、話ずきの男を命令どおりに動かす秘訣を、まんまと発見しおったな。」『プラトン全集』第5巻, 鈴木照雄・藤沢令夫訳『饗宴・パイドロス』(岩波書店, 1974年), 154頁。

²³ 『ラケス』188 C。「ラケス 話 (議論・言葉) というものにつきましては、ニキアス, 私の態度は一つなのですが, もしよければ一つでなく二つだと言ってもよろしい。じっさい私は, 話 [を聞くこと] の好きな人間にも, 話 [を聞くこと] の嫌いな人間にも, 見られるでしょうからね。」『プラトン全集』第7巻, 北嶋美雪・山野耕治・生島幹三訳『テアゲス・カルミデス・ラケス・リュシス』(岩波書店, 1975年), 132頁。

²⁴ 『テアエテトス』161 A。「ソクラテス 何のことはない, あなたは, テオドロス, 言論狂ですよ, それもお人よしの! ……」『プラトン全集』第2巻, 水地宗明・田中美知太郎訳『クラテュロス・テアイテトス』(岩波書店, 1974年), 236頁。

²⁵ 『国家』第九卷 582 E。「必然的に」と彼は言った, 「知を愛し言論 (理) を愛する人が賞める事柄こそが, 最も真実であるということになります。」『プラトン全集』第11巻, 田中美知太郎・藤沢令夫訳『クレイトポン・国家』(岩波書店, 1976年), 661頁。

²⁶ 『法律』第一卷 641 E。「ギリシア人一般の見るところによれば, わたしたちの

(φιλόλογοι)〔言論好き〕と呼ばれ、アリストテレスでは『弁論術』第二巻第23章²⁷において、スパルタ人が「少しも言論を愛する者でない」(ἥκιστα φιλόλογοι)と呼ばれている。それは彼らが非哲学的であるというのではなく——彼らはもとよりその質ではなかった——、多様な伝達を受け取ることができないという意味である。アリストテレスの『問題集』第18巻には、「フィロロギアについて」〔ὅσα περὶ φιλολογίαν〕²⁸とあり、提起されている問いは〔本を〕読むこと、弁論学、文体論、物語に関係する。したがって、ここでのこの表現はすでにほとんど専門的な意味をもっており、〔本を〕読むことについてのわれわれの注釈が裏づけられる。古い言語の用法に関しては、Phrynichos, 前6世紀後半から5世紀前半のアテナイの詩人。 [ロベック Christian August Lobeck, 1781-1860. ドイツの古典文献学者。ここで引用されている著作は Phrynichus (1820) と思われる。], 392頁)において、「ロゴスを愛し、かつパイデアのことで一所懸命になったフィロロゴス」(Φιλόλογος ὁ φιλῶν λόγους καὶ σπουδάζων περὶ παιδείαν)と言われている。文献学とフィロマテア(φιλομάθεια)〔学問愛, 知識愛〕との同一性は、すでに上で触れておいた。もちろんプラトン(『国家』第二巻 p. 376 B)にとって、

国は言論好きでおしゃべり、ラケダイモンとクレテは、前者は寡言、後者は饒舌より思慮の豊かさを養っている、とされています。』『プラトン全集』第13巻、向坂寛・森進一・池田美恵・加来彰俊訳『ミノス・法律』(岩波書店、1976年)、94頁。

²⁷ 『弁論術』第二巻第23章。「……またラケダイモンの人たちはキロンを、自分たちは少しも言論を愛する者などではなかったが、元老院の一員にさえたし、……。」『アリストテレス全集』第16巻、山本光雄・斎藤忍随・岩田靖夫訳『弁論術・アレクサンドロスに贈る弁論術』(岩波書店、1977年)、179頁。

²⁸ この部分は邦訳では、「学習に関する諸問題」となっているが(『アリストテレス全集』第11巻、戸塚七郎訳『問題集』(岩波書店、1977年)、250頁)、英訳では“Problems concerned with Studiousness”と訳されている(*The Loeb Classical Library* 316)。これらの近代語訳からもわかるように、ここでのφιλολογίαは、いわゆる「文献学」ではなく、「勉強好きなこと」、「学問に励むこと」を意味している。

フィロマテス (φιλομαθής) [学問を愛好すること] とフィロソフオン (φιλόσοφον) [知を愛すること] は同一である。プラトンの見解にしたがえば、文献学にはフィロドクソン (φιλόδοξον) [名誉愛, 榮譽心] がより合致しているが、しかしもちろんそれは、文献学がいかなる理念も認識しない場合に限られている。われわれの見解にしたがえば、文献学は理念を認識すべきであるので、プラトンの概念にしたがえば、それは哲学に属し、したがってそのかぎりではフィロマテス (φιλομαθής) [学問を愛好すること] もそれに帰属することになるであろう。エラトステネス以来その名称は博学 (Polymathie) を表したが、そのときには哲学もまた含まれた。われわれがプラトンにおいて見出すのと同じ意味で、ストラポンはこの表現を (ディオドロス [Diodorus Siculus. 紀元前1世紀後半のギリシアの歴史家。四十巻よりなる《図書館 Bibliothēke》(Bibliotheca Historica) の名で呼ばれる世界史を著したが、その大部分は現在では失われている。] 『図書館』第十二巻, 53 におけるように) アテナイ人に適用しているが、彼はその会員にはあらゆる種類の学者、つまり単に文法学者ではなく、数学者、物理学者、等々、それどころか哲学者もいた、アレクサンドリアの学芸館について語り (ΓΕΩΓΡΑΦΙΚΟΝ, Book XVII, C 794)²⁹、彼らを「学芸館に関与している学問好きな男たち」(οἱ τοῦ Μουσείου μετέξοντες φιλόλογοι ἄνδρες) と名づけている。彼はここでエラトステネスよりもより広範に、フィロロゴイ (φιλόλογοι) を学者一般と見なしている。後代の人々においては、フィロソフォス (φιλόσοφος) とフィロロゴス (φιλόλογος) の概念は、完全に対立するものになっている。かくしてわれわれはこの対立がセネカの書簡のなかで言表されているのを見出すが、そのなかで彼は博学者としての文献学者をからかっている (108 § 29 ff.)。プロティノスは、ロンギノス [Dionysius Longinus. ギリシアの文芸批判についての書『崇高について』De sublimitateの著者とされる1世紀初めの修辞学者・批判家。] について語ったが (ポルフェリオス [Porphyrios, 232(33)-305頃。ギリシアの哲学者。ローマで師のプロティノスの著作を出版し、新プラトン主義哲学の普及に尽力した。] 『プロティノスの一生と彼の著作の順序について』Vit. Plotin. c. 14 およびプロクロス [Proklos, 410(11)-485.]

²⁹ Cf. *The Geography of Strabo*, in *The Loeb Classical Library* 267 (London: William Heinemann Ltd., 1963), pp. 34-35.

ギリシアの哲学者。新プラトン主義の最後の偉大な代表者としてアテナイで教え、キリスト教に反対してギリシア思想を強く擁護した。]『ティマイオスについて』 *In Timaeum* I p. 27B), 彼が語った理由はそれとは関係しておらず、主として以下の点に存していた。すなわち、彼はロンギノスを寓意的・思弁的に解釈せず、ただ単純に冷静な解釈者とみなしたのである。曰く、「ロンギノスはたしかにフィロロゴス〔愛言者、文献学者〕ではあるが、決してフィロソφος〔愛知者、哲学者〕ではない」(φιλόλογος μὲν ὁ Λογγίνος, φιλόσοφος δὲ οὐδαμῶς)。ロンギノスの「フィロロゴスたちの交わり」(Φιλολόγων ὁμιλία)は存在したし、そしてエウセビオスはポルフェリオスの「フィロロギアに関する講義」(φιλολογικὴ ἀκρόασις)を引用している(『福音の準備』Pr. E. X, 3)。彼らは全般的な文学に通じていたと思われる。

学識に富み、かつ無数の実例を含んでいる以下の論文、すなわち、著書『ヘロディアヌスのより完全な三通の手紙』*Herodiani scripta tria emendatiora* (Königsberg, 1848)³⁰, S. 379ff. を背景にした、『アナレクタ』*Analecta* 第一巻所収の、レールス〔Karl Ludwig Lehrs, 1802-1878, ドイツの古
典文献学者。ケーニヒスベルク大学教授。〕の論文「フィロロゴス、グラムマティコス、クリティコスの語彙について」*De vocabulis Φιλόλογος, γραμματικός, κριτικός* を参照のこと。

フィロロギア(φιλολογία)という名称は、いずれにせよ最も特徴的なものである。ローマ人の間では、それが普遍的な学識を、しかも哲学との対比で、表現するかぎり、*litterae*〔学問、学識、教養〕という名称もまた、文献学を表示するために用いられる。「分別があり、知恵を愛し、勉強熱心な」(*sapiens et sapientiae amans, studiosus*) という意味では、誰でも哲学者であることはできるが、しかしその場合、彼が *litteratus*〔教養のある、学識のある〕であるわけではない。かくしてエピク羅斯は「分別はあるが博学ではない人」(*vir sapiens non litteratus*)であった。ひとは *litteratus* であることなしに *humanus*〔人間らしい、気品のある、教養のある〕であ

³⁰ ヘロディアヌス (Aelius Herodianus, ca. 180-250) は、アレクサンドリアに生まれて、ローマで活躍したローマ時代の最も有名な文法家のひとり。

ることすらできる。eruditus〔教養のある, 該博な〕は ferus〔野蛮な, 粗悪な〕や immanis〔野蛮な, 粗暴な〕と対立している。doctus〔教えられた, (ギリシア学に) 精通した〕は imperitus〔未経験の, ……に通じていない〕と対立している。けれども, 両者はしばしば, スエトニウスの『ローマ皇帝伝』第四章の「カリグラ」53における eruditio〔博学, 博識〕のように, たしかに litterae に関係づけられる³¹。litteratura はそれゆえ広義の文献学である。それは, もちろんさしあたり言語の知識を表す grammatica〔言語, 文法の研究〕が, 後に一般に litterae を表すのと同じである。グラムマティコス (γραμματικός) は学者一般, つまり学問的な教養を有する者を表す。グラムマティステース (γραμματιστής) は〔小学校の〕言語教師である。ところで, 若干のラテン人はグラムマティステース (γραμματιστής) を litterator〔半可通〕と呼んでいる。litteratus〔教養のある, 学識のある〕は彼らにとってグラムマティコス (γραμματικός) と同じである。前者は「学問をかじってはいるが, 学識が完全ではない」(non perfectus litteris, sed imbutus) ということであり, また「卑しい, 金で買える」(servus, venalis) ということでもあり得た (スエトニウス『名士伝』*De Viris Illustribus* 所収の)「文法家伝」4)³²。けれどもこの言語用

³¹ ベークが言うとおりに, Suetonius の *De Vita Caesarum* の第四巻 Gaius Caligula 53 には, “Ex disciplinis liberalibus minimum eruditioni, eloquentiae plurimum attendit, quantumvis facundus et promptus, utque si perorandum in aliquem esset.” とある。Suetonius, *De Vita Caesarum*, in *The Loeb Classical Library* 31 (London: William Heinemann Ltd., 1964), pp. 484-485. なお, この部分を邦訳で示すと, 「教養学芸のうち, カリグラは詩文学にほとんど関心を示さず, 雄弁術に多くの時間をさく。確かに彼は弁がたち, 臨機応変に話ができた。確かに自己を主張せねばならぬときには, 特にそうであった。」(スエトニウス著, 国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』下巻〔岩波書店, 1986〕)となる。

³² Cf. Suetonius, *De Viris Illustribus*, in *The Loeb Classical Library* 38 (London: William Heinemann Ltd., 1965), pp. 402-403.

法は一般的ではない。そして litterator〔文法家〕は litteratus〔文字を書き表した、(転意)学識ある〕と同じ意味で用いられる。litterae とグラムマタ (γράμματα) は、〔フィロロギア (φιλολογία) という〕この言葉そのものとほとんど同じくらい、純粋にフィロロギア (φιλολογία) の概念を含んでいる。但し、ロゴス (λόγος) は本源的なものであり、記号としてのグラムマ (γράμμα) の基礎となっているものである。セネカは上で引証した書簡 (108) において、Philosophus と Philologus と Grammaticus を区別している。Grammaticus ということによって彼が理解しているのは言語学者であり、**博学者**という意味での Philologus ということによって理解しているのは、あらゆる学問において風変わりなものを探し求める、骨董品の商人である。これに対してクィンティリアヌス [Marcus Fabius Quintilianus, 35頃-100頃。ローマの修辞学者・教育家。ルネサンス時代の教育研究に多大の影響を与えた。] は、文法論に完全に文献学の概念を与えている (II. 1, 4)。なぜなら、文法論は彼においては「正しい話し方の原則を除く、ほとんどすべての最高の技術についての知識」(praeter rationem recte loquendi prope omnium maximarum artium scientiam) を包括しているからである。アリスタルコス [Aristarchos, B.C. 217-B.C. 145。サモトラケのアリスタルコス。アレクサンドリアの文献学者。] 以降のギリシアの技巧家たちが、グラムマティケー (γραμματική) という名称のもとに、大抵は言語学と著述家の解釈および批判とを統合して以来、この言葉はこうした広いひろがりであり、しばしばそしてすでにギリシア人の間で、理解されたのであった。クラッセン『初心者にとってのギリシア語文法について』*De grammaticae Graecae primordiis* [Diss. Bonn, 1829], 81頁参照。マイヤー [Moritz Hermann Eduard Meier, 1796-1855。ドイツの古典文献学者。ベルリン大学におけるベークの学生の一人で、1825年以降、ハレ大学教授を務める。] の1842-43年のハレ大学講義目録へのプロオイミオン (Meier vor dem Halle'schen Katalog 1842-1843 [『小品集』*Opuscula Academica* 第二巻20頁以下]) [をも参照のこと]。

文献学に対するもう一つの表現は、革新者たちによってはじめて作り出されたものであり、いわゆる Humaniora〔古典人文学〕の概念がそれである。けれどもこれはとりわけ古典作家を読むことを言い表すべきもので、したがってあまりにも一面的である。それと同時に他方では、それはその本来的な意味にしたがえば、あまりに多くのことを語る。humanitas〔フマ

ニタス、人間性]とは人間の本性、つまり動物的なものとは対立している
純粋に人間的なものである。さて、普遍的な教養というものは、動物も追
い求める利益追求からは自由であるが、これは人間を本来的に人間にする
ので、ひとはこれを目標とする研究を *studia humanitatis* [フマニタス研
究、古典的人間教養研究]と名づけた。[だが、]本来の認識と再生産との
対立がそこには存在しないので、この表現を文献学に適用するのは行き過
ぎである。その語法については、ヨーハン・アウグスト・エルネスティ
[Johann August Ernesti, 1707-1781. ドイツ
のプロテスタント神学者・古典文献学者。]の『古典人文学研究の境界線を引くことにつ
いての綱領』*Progr. de finibus humaniorum studiorum regundis* (1738)と
『キケロの鍵』*Clavis Ciceroniana*³³のフマニタスの項の抜粋を参照されたい。
古代人はなるほど *studia humanitatis*とは言ったが、*humaniora*とは
言わなかった。それにまた、*humanitas*そのものと同様、本来は類概念で
あるところのこの概念は、いかなる比較変化も許容しない。したがって、
この表現はおそらく中世にはじめて成立したものであろう。ヴォルフ
[Friedrich August Wolf, 1759-1824. ドイツの古典学者。ハレ大学でベークを指導し、のちにベルリン大学で同
僚となる。《*Darstellung der Altertumswissenschaft*, 1807》は古典学研究のバイオニア的著作として名高い。]『古代研究
の学芸館』*Museum der Alterthumswissenschaft*³⁴第一巻、12頁。

同様に、たとえ二三の国民がこの名称に広範な外延を与えていようとも、
批判という名称も、あるいは、英国人が使用している表現である *classical
learning* [古典学]や、最後に、フランス人はいまではそれに代えて *littér-*

³³ 『キケロの鍵』*Clavis Ciceroniana*と呼ばれているものは、より正確には、「キ
ケロの鍵、ないしキケロの著作に関する文献学的・批判的な事項と用語の索引」
(*Clavis Ciceroniana sive indices rerum et verborum philologico-critici
in Opera Ciceronis*)と名づけられているもので、エルネスティが編纂した
『キケロ全集』*Opera Omnia ex recensione Jo. Augusti Ernesti, cum eiusdem
notis et clave Ciceroniana* (Halle, 1774)に収められている。これは今日で
も非常に価値の高いものと見なされている。

³⁴ *Museum der Alterthumswissenschaft*. Herausgegeben von Christian Wil-
helm Friedrich August Wolf und Philipp Carl Buttmann. Berlin, 1807ff.

ature〔文学, 文芸〕と言うが, belles lettres〔文芸〕も, 文献学全体にとっては不十分である。ライプニッツは, すべての哲学者のなかでも最も偉大な文献学者であり学者であったが, 彼はわれわれが文献学に付与している意味を, 学殖〔Erudition〕という言葉とほぼ結びつける。彼の見方によれば³⁵, 学殖はわれわれが人間について学ぶもののうち, 事実に関する事柄〔quod est facti〕に, 哲学は理性あるいは法に関する事柄〔quod est rationis sive juris〕* に関係する。

§6. さて, われわれはそのさまざまな側面がさまざまな名称で暗示されている, 文献学的研究の目的と応用を調べている。文献学は学問であるとの要求を立てる。しかし同時に, 古典古代を歴史的に構成すること自体が何某か芸術的なことである以上, それはひとつの技術である。全く同様に, 哲学でいう弁証法はひとつの技術である。しかし学問の目的** は, アリス

³⁵ ベークが念頭に置いていると思われるライプニッツの言葉は, 以下のごとくである。「そして理性あるいは法に関する事柄が事実に関する事柄と相異なるように, そのように哲学はたしかに学殖と相異なる」(et sic quidem philosophia ab eruditione differt, quemadmodum id quod est rationis sive juris, ab eo quod est facti)。Gottfried Wilhelm Leibniz, *Die philosophischen Schriften*, herausgegeben von G. I. Gerhardt, Band 3 (Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1887; Nachdruck, Hildesheim, Zürich, New York: Georg Olms Verlag, 1996), S. 14.

* 1839年の演説「文献学的批判に関するライプニッツの見解について」(Ueber Leibnizens Ansichten von der philologischen Kritik) (『小品集』第二巻, 245頁以下)を参照のこと。

**1817年の演説「学問的教育ならびに学識の目的と特質について」(De fine et ingenio doctrinae disciplinaeque academicae) (『小品集』第一巻, 38頁)を参照のこと。さらには1853年のドイツ語の演説「学問, とりわけ実践的ならびに実証的なものに対するその関係について」(Ueber die Wissenschaft, insbesondere ihr Verhältniss zum Praktischen und Positiven) (『小品集』第二巻, 84頁以下)を参照されたい。

トテレスが言うように、知らないし認識そのものである。古典古代をその全体の広がりにおいて認識することは、それゆえかかる文献学の唯一の目的であり得るが、しかしこのことは決して月並みのことではない。なぜなら、それは人間精神が何千年にもわたってもたらしてきたもののうちの、最も高貴なものを認識することであり、また神的ならびに人間の事柄の本質に対する深遠かつ遠大な洞察をもたらすからである。たとえ個々の点において、近代がそれを大幅に発展させたとしてもである。ひとはここで人間的認識や人間的諸関係の営み全体を捉えることを学び、人間の本質的な利害を超越したひとつの領域に自己を定位するのである。そこにおいては、現在のはるか背後に存在しているために、あらゆる情熱が沈黙し、それゆえ公平無私な判断が可能である。シェリングは正当にも次のように言う(『学問的研究の方法に関する講義』76頁)。すなわち、文献学者は「芸術家と哲学者とともに最高の段階に立っている。あるいはむしろ、〔芸術家と哲学者の〕両者は文献学者において相互に混ざり合う。文献学者の果たすべき本務は、芸術ならびに学問の作品を歴史的に構成することであるが、文献学者はそれらの歴史を生き生きとした直観で把握し叙述しなければならない」³⁶。このような考えは、たとえその広がりにおいてはそうでないとしても、その精神においては全面的に、わたしの考えに非常に近い。このような目的にしたがって形成されるとすれば、古典的古代に関する文献学は疑いなく満足のいく研究となるであろう。われわれの時代の覚醒された生産性ゆえに、文献学は満足感の欠如を後に残したが、かかる満足感の欠如というものは、このような高められた見解によって取り除かれる。文献学が多様な事柄からなる広範な領域を提供するということは、以上に述べたことにももちろん含まれている。しかし学問としては、文献学はすべてのもの

³⁶ F. W. J. Schelling, *Schellings Werke*. Nach der Originalausgabe in neuer Anordnung herausgegeben von Manfred Schröter, Bd. 3, *Schriften zur Identitätsphilosophie, 1801-1806*, 3. unveränderte Aufl. (München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1977), S. 268.

を統一性のもとにもたらさなければならない。なぜなら、あらゆる学問は存在するものを、単にその孤立においてのみならず、その統一性において、つまりあらゆる個別的なものの連関において、示すものだからである。だが、統一性を生み出すものはもっぱら理念のなかにある。素材は徹底的に多様で拡散している。それゆえ、学問は存在するものがそのうちに存している理念を形づくり、そしてかかる理念の連関を示さなければならない。解釈と批判がちりぢりばらばらの営みとしてなされるときのみ活動しているような、対象の、あるいはむしろ素材の孤立化した考察は、したがってあらゆる学問性をなしで済みます。それにもかかわらず、統一性はここではアプリアリな演繹法によって生み出されはしない。なぜなら、文献学の前にある多様なものや経験的なものは、そのような演繹を行う能力をもってもおらず、またかかる方法は文献学的でもないからである。むしろ所与のものを多様な仕方で貫き通し、そして全体を実際に統一へと形づくる理念は、帰納法によって示されなければならない。そのような統一性へと到達するためには、キケロの『弁論家について』第一巻5以下に述べられている雄弁のためにと同じように³⁷、もちろん多くのことが必要である。純粹な心、あらゆる善と美とにのみ開かれた感覚、最高のものを超感覚的なものに対して最小のものに対しても等しい感受性のあること、悟性の鋭利さと結びついた感情と想像力、感情と思考との、あるいは生と知との調和的な相互的陶冶——こうしたことはいかなる学問にとっても、そしてまた文献学にとっても、不断の勤勉さと並んで、真の研究の根本条件である。^{*}しかしまた、それは多くのお互いに対立する活動を要求するので、この課題はますます困難である。かくして批判(Kritik)はドグマティックに叙述

³⁷ 『キケロ選集7 修辞学II』(岩波書店, 1999年) 11-13頁参照。

^{*} 1823年のラテン語の演説「学殖の徳について」(De eruditorum virtute) (『小品集』第一巻, 112頁以下)を参照のこと。

する精神ならびに理念を把握する精神³⁸ に対して、空想に対しても徹底的に対立する。それどころか批判によってその鋭さを失った記憶に対してすら対立する。それゆえ、このようにして一刀両断的な悟性と直観的に措定する精神との不断の戦いが生じる。というのは、批判家がしばしば他者の思想を否定するように、後者が措定するものを、前者はふたたび否定しようとするからである。文献学における百般の事例がこうしたことを示している。そこにおいて個々人は正しい直観によって深い思想を措定するが、単に批判的に組織化された頭脳は、そうした思想を再び否定してしまうのである。均衡がとれることは稀である。多くの人はあらゆる理念、あらゆる構成に対して、真に烈しい怒りを覚えており、非直観的な批判のなかにも自分たちの名声を求める。さらには、博覧 (Polyhistorie) もまた〔直観的・思弁的な〕精神に徹底的に対立しており、そして批判はかかる博覧によって同様にその威力を失う。それは蔓延している思弁によって、ひとが博覧に対してふたたび鈍感になるのと同じであるが、この蔓延している思弁は、小さいもの、はっきり限界づけられたもの、個別的なものを軽視し、より大きな普遍的な理念のみを捉えようと欲する。だが、普遍的なものの特異的なものの統一がはじめて正しい認識を保証するのである。言語感覚 (Sprachsinn) もまた現実的なものへの方向性つつねに闘っている。ジャン・パウル [Jean Paul, 1763-1825. ドイツの作家。ゲーテやシラーの同時代人で、^典 独自の深遠な作品世界は、とくに上流の婦人に熱烈な読者を見出した。] が言うように、「事柄の貧困からひとは好んで言葉に寄りかかり、これを分解し分析する。」それゆえ、ひとはまたしばしば最も学識に富んだ文献学者において、事柄

³⁸ 「ドグマティックに叙述する精神ならびに理念を把握する精神」 (dem dogmatisch darstellenden und dem Ideen auffassenden Geiste) は、少し下では「直観的に措定する精神」 (des anschauenden setzenden Geistes), あるいは端的に「精神」 (dem Geiste) と言い換えられているが、ベークがここで念頭に置いているのは、「蔓延している思弁」 (überhandnehmende Speculation) という表現からも推測されるように、おそらくヘーゲル哲学に代表される思弁的な精神のことであろう。

の知識が著しく欠如していたり貧しかったりするのを見出す。逆に素材にのみ関心に向けている人は、言語が与える認識のデリケートな形式を普通は軽視する。なぜなら、事柄と言葉は核心と外皮のようなものではなく、両者はお互いに密接に結びついているからである。精神と嗜好とをより自由に形成しようと努める人文主義 (Humanismus) は、まさに文献学の領域において、個別的なものに執着するにもかかわらず必然的な、過度の瑣末主義 (Mikrologie) と鋭く衝突する。なぜなら、ひとは文献学において、小さなことをなおざりにすることによって誤謬に陥いたくなければ、ある程度術学的 (pedantisch) でなければならないからである。最後に、文献学において、古典古代と近代との闘争に決着がつく。古典古代に対する純理論的な関心に対して、現代ならびに実践的な生の諸要求はその権利を主張する。しかし爾余のあらゆる諸対立におけるのと同様、ここでもまた仲介は可能である。古典古代の諸理念は、近代的な思惟との生き生きとした関係のうちに置かれなければならないし、また置かれることができる。そしてそのとき近代的な思惟に純化的作用を及ぼす。ひとはここからして、文献学が精神の多面的な形成を必要とし、またそれを与えるということを確認する。

目的に関するものとは異なる問いは、益 (Nutzen) ないし応用 (Anwendung) に関する問いである。すべての学問は認識という益を有しているが、魂ならびに心の明瞭性、平穩、および強さはかかる認識に源を発している。最高の益そのものは真、美、善のうちに存している。正しい認識から正しい行為は生ずる。^{*} さて、もし文献学が大きくかつ高度な教養を有する民族

^{*} 1824年のラテン語の演説「活発かつ力強い学問について」(De vegete et valida scientia.) (『小品集』第一巻, 121頁以下) と、1853年のドイツ語の演説「学問、とりわけ実践的ならびに実証的なものに対するその関係について」(Ueber die Wissenschaft, insbesondere ihr Verhältniss zum Praktischen und Positiven) (『小品集』第二巻, 86頁以下) を参照のこと。さらには、1813年のベルリン大学講義目録へのプロオイミオン「善人以外の誰も完

の全認識を、その実践的認識をも指し示すとすれば、それは偉大な、古典的教養を有する政治家たちが証明してきたように、実践的行為にも益をもたらすであろう。^{*} われわれの時代の政治家にこの教養が欠如していることは、十分敏感に示されている。まさにわれわれの時代にとって、古典古代は政治の面で啓発的である。そこではすべての原理はまったく明瞭な状態にある。目下、実に多くのへぼ学者たちは古典的文献学についてつまらぬことを語る。彼らは言う、中世ならびに現代に至るまでの近代的発展の全時代は古典的文献学を凌駕する、と。このことは、古典古代が近代的発展と関連がないと仮定するときのみ、意味をもっている。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト [Karl Wilhelm von Humboldt, 1767-1835, ドイツの新人分主義の代表者。プロイセン] の政治家。言語学者。言語を人間精神の発現として捉え、ことばの創造性を強調した。] は、まことに時代の頂点に立っており、その時代に、重大なる事態に、またあらゆる重要な出来事に介入した人物であったが、彼の弟³⁹ がわたしに語つ

全な演説家ではあり得ない、というキケロの見解について」(De Ciceronis sententia, oratorem perfectum neminem posse esse nisi virum bonum) (『小品集』第四卷, 65 頁以下), 1834/35 年の「学芸研究の真正の益について」(De genuine atrium studiorum utilitate) (『小品集』第四卷, 397 頁以下), 1837/38 年の「正しく制御されるべき、活動的、観想的、快楽的という生の三原則について」(De tribus vitae sectis, activa, contemplativa, voluptaria recte temperandis) (『小品集』第四卷, 426 頁以下), および「学芸研究において守られるべき魂の自由について」(De libertate animi in atrium studiis tuenda) (『小品集』第四卷, 524 頁以下) を参照されたい。

^{*} 1828 年のラテン語の演説「教育と国家との間に存在する原則について」(De ratione quae intercedat inter doctrinam et rempublicam) (『小品集』第四卷, 157 頁以下) を参照のこと。

³⁹ アレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769-1859) のこと。長年パリに住んでいた彼は、1827 年パリからベルリンに居住地を移すと、兄ヴィルヘルムを介して間もなくベークとも親しくなった。彼は地理学者として、古代の地理学や天文学をより詳しく究明しようと考えていたので、ベークの古典古代学の知識に深い関心を抱き、両者の間には親密な学問的交流が始まった。彼は古典古代学の基礎を学ぶことを熱望し、1833/34 年の

たところでは、いかなる備忘録も遺さなかった。その理由は、彼はこのような惨めな状態にはとどまりたくなく、むしろそうすることには時間がかかっても、その時間中ギリシア人とローマ人を学ぶことを好んだからである。* 古典古代は真の政治的自由とそれの真正の原理を教示する。それは絶対主義と衆愚政治が唾棄すべきものであることを示す。古典古代を政治的に学んだことのある人は、両極端のいずれも信奉できないし、専制政治も社会主義や共産主義の夢も信奉できない。古典古代がすでにそのような夢を見尽くして克服しているからである。古代世界の共和制は、若干の人々が考えるように、危険なものではない。但し、ひとがその基礎となっている自由の感情を有害なものを見なす場合は別であるが。愛国主義に関しては、ヘルバルト [Johann Friedrich Herbart, 1776-1841. ドイツの哲学者・教育学者。教育の目的を倫理学に、その方法を心理学に求め、教育学を始めて体系化した。] が彼の一般教育学の85頁でこう述べている。「ヨーロッパ的愛国主義を思い浮かべ、ギリシア人とローマ人をわれわれの先祖として、また分裂を党は精神の不幸なしるしとして考えてみよ。彼らにかかる党は精神によって消滅せざるを得なかったのである。……われわれは古代へ立ち帰ろうではないか!」.** さらには、ひとは古典文献学にはキリスト教的意識が欠如していることを口にする。これについてわたしはこう考える。文献学は学問であるが、キリスト教はドグマティックに考察すれば、ひとつの実定宗教である。例えば、15世紀の中葉のように——そこでは実際にゲミストス・プレートーシ

冬学期にベークの講義を熱心に聴講した。

- * 1835年のヴィルヘルム・フォン・フンボルトへの追悼の辞(『小品集』第二巻, 211頁以下)を参照のこと。さらには、「フリードリヒ大王の古典研究について」(Ueber Friedrich's des Grossen klassische Studien) (1846年の演説) (『小品集』第二巻, 336頁以下)を参照されたい。
- **1811/12年のベルリン大学の講義目録へのプロオイミオン「ギリシア人において学芸と祖国の間に存在しているわれわれのものとは異なる, 原則について」(De ratione quae inter artes et patriam intercedat apud Graecos a nostra diversa) (『小品集』第四巻, 39頁以下)を参照のこと。

[Gemistos Plethon, 1355頃-1450(52)。コンスタ] ンディノール出身の新プラトン主義哲学者。 が、『律法の書』 *Νόμων συγγραφή* (1858 項) のなかで、古代の祭儀を修復しようと欲したが——、文献学が意図的にキリスト教に背を向けていると信じる人は誰もいない。古典古代の研究は迷信に、つまり偽りのキリスト教に背を向けることしかできない。学問と実定宗教はまったく異なった分野に位置している。数学、化学、あるいは天文学がキリスト教的意識とあまり関係がないように、文献学もあまり関係がない。文献学はそれ自体のうちにその本質を有している。文献学者はキリスト教徒であり得るし、逆にキリスト教徒は文献学者であり得るが、しかし両者はそれぞれ別物である。実際、大抵の人は文献学者がいなくてもキリスト教徒であり得るし、そしてユダヤ教徒やイスラム教徒は有能な文献学者であった。ひとはすべての事柄を相互に混同してはならない。文献学はこの点では完全に哲学と一致している。それゆえ、文献学はたしかに反キリスト教的ではないが、キリスト教によって再生されなければならない、という見解もまた適当ではない。ひとは学問を徹底的に宗教から独立させておかなければならない。さもなければ、ひとは必然的に今日の時代概念の際限なき混乱へと至る。実際、今日の時代概念の際限なき混乱は、数学や自然科学ですらもキリスト教的精神において捉えようとする。キリスト教的見地から古典古代の研究を論駁する人たちを、最も見事に論破しているのは、**聖バシレイオス** [Basileios (Kappadokia)^(ギ), Basilius(ラ), 330頃-379。カッパドキア三教父の一人。ニューッサのグレゴリオスの兄。生涯修道生活を行い、教理史上は半アレイオス主義とニカイア信条との和] 解に尽力した。 がそこで古典研究を推奨している、彼の書物『若人に。ギリシア文学からどのようにして益を得るか』 *λόγος ὁ πρὸς τοὺς νέους* ⁴⁰ と、**バシレイオス** への追悼演説においてナジアンゾスの **グレゴリオス**

⁴⁰ 原著の正式なギリシア名は、*Πρὸς τοὺς νέους ὅπως αὐτὸς ἐξ Ἑλληνικῶν ἀφελοῦντο λόγων* であるが、一般的には15世紀にレオナルディ・ブルーニ (Leonardi Bruni) がラテン語に訳した書名 (*Ad adolescentes*; ed. R. J. Deferrari/M. R. P. McGuire, LCL, 1934; Migne, *Patrologia, ser. graeca* 31, 563-590) で知られている。最近のテキストとしては、N. G. Wilson (ed.), *Saint Basil on the Value of Greek Literature* (London: Duckworth, 1975).

[Gr̄eḡor̄ios Nazianz̄os (ギ), Gregorius Nazianzenus (ラ), 329 (330)-390 (391)。バシレイオス、ニュッサのグレゴリウスとともに、カッパドキア三大教父の一人。バシレイオスとは無二の親友で、彼とともにオリゲネスの著作の抜粋である『フィロカリヤ』を編集した。]

が述べたものである。ひとはこれについて、ならびにキリスト教的見地からの古典研究の敵視について、ヘルマン・デルゲンスの書物『聖バシレイオスと古典研究』*Der heilige Basilius und die klassischen Studien* (Leipzig, 1857) から優れた情報を得ることができる。但し、惜しむらくは、この書物は文意が不明確で文章として推敲が足りないことである。*

文献学が教養一般に対してもたらす益から、いまやとくに文献学を学校の授業に応用することにおけるその教育学的価値が生じる。* われわれの時代には、非常に多くの教育学的問いが話し合われてきたし、またひとの

* 1846年のラテン語の演説「文学、哲学、そしてことに古典古代学の現今の状況について」(De litterarum, philosophiae imprimis et antiquitatis studiorum conditione praesenti) (『小品集』第一巻, 328頁以下), 第11回文献学者集会の開会演説(『小品集』第二巻, 194頁以下), 「学問、とりわけ実践的ならびに実証的なものに対するその関係について」(Ueber die Wissenschaft, insbesondere ihr Verhältniss zum Praktischen und Positiven) (『小品集』第二巻, 91頁以下), 1839年の演説「文献学的批判に関するライプニッツの見解について」(Ueber Leibnizens Ansichten von der philol. Kritik) (『小品集』第二巻, 250頁), 1861年の演説「国王ヴィルヘルム陛下が陥られた困難な状況について」(Ueber die Schwierigkeiten, unter denen S. Maj. Der König Wilhelm den Thron bestiegen hat) (『小品集』第3巻, 88頁)を参照のこと。

**1819年のラテン語の演説「完全な人間性へと形成されるべき人間について」(De homine ad humanitatem perfectam conformando) (『小品集』第一巻, 74頁以下), 1822年の「古代研究について」(De antiquitatis studio) (『小品集』第一巻, 106頁以下), 1826年の「哲学ならびに歴史学と爾余の学科との結びつきについて」(De philosophiae et historiae cum certis disciplinis coniunctione) (『小品集』第一巻, 142頁以下), 1832年の「公的機関によって伝播されるべき慣習・文学・芸術について」(De moribus litterisque et artibus publica institutione propagandis) (『小品集』第一巻, 202頁以下)を参照のこと。さらには、第11回文献学者集会の開会演説(1850) (『小品集』第二巻, 187, 195頁以下)を参照されたい。

行うすべてのことについて説明しようと正当にも努力されているが、ひとはこの時代に、なぜ古典古代の研究が学校の授業の主要部分を、それどころか最も卓越した部分をなすのか、という問いを提起した。ひとはその答えを見つけたと思った。すなわち、こういうことがもともと起こったのは、近代の全学問がいわゆる文芸復興 (restauratio litterarum)⁴¹ によって古典古代から発展してきたからであると。だがいまや近代の学問は独立していると仮定されている。したがって、ひとが独自の教養と独自の知識に到達したのち、古典古代によるあのような模範が何のために今なお必要なのかわからなかった。そこからひとは、それにもかかわらず、古典古代の研究としての文献学が学校の授業の基礎であり続けるべき理由を示す、別の原理を探したのである。かくしてひとは、一方では数学によって、他方では古典的言語 — なぜ古典的言語に限定され、なぜ近代的言語によらないのかは、あまりよくわからない — によって獲得されるべき、いわゆる形式的教養という見解に到達した。古典古代からは言語以外に多くのものが

⁴¹ restauratio litterarum は、文字通りに訳せば、「文学 (学問・教養) の復興」という意味であるが、おそらくこれは、今日われわれが「ルネサンス」(Renaissance) という語で理解しているものと、実質において大差ないものと思われる。一般に、「ルネサンス」という概念は、1855年フランスの歴史家ジュール・ミシュレ (Jules Michelet, 1798-1874) が、『フランス史』*Histoire de France* の第七巻にこの名をあてたことに端を発する、と言われている。その後1860年、スイスの歴史家ヤーコプ・ブルクハルト (Jakob Burckhardt, 1818-97) が名著『イタリア・ルネサンスの文化』*Die Cultur der Renaissance in Italien: Ein Versuch* を上梓したことによって、この概念は学術世界で不動のものとなったが、ベークの講義は「ルネサンス」概念が普及する以前になされていることに注意を払う必要がある。したがって、ベークは Renaissance という概念も、その基となるラテン語 *renacium*, *renascentia*, *renascitura* や、あるいは類似の *regeneratio* や *renovatio* も用いず、*restauratio* というラテン語を用いているが、*restauratio litterarum* という表現がどの程度一般的に用いられていたのかは、筆者には明らかではない。

獲得され得るといふこと、すなわち、古典古代に由来する、歴史や地理や他の専門知識など、多くの事柄もまた形式的教養を与えるということ、ひとは考慮に入れなかった。形式的教養の原理は、もちろん古典古代の研究によって到達されるものではあるが、にもかかわらず、われわれの時代の教養と一見して不釣り合いな状態になってしまったので、それはわれわれの学校の授業のなかにあの研究の歴史的に与えられた立場を基礎づけるための、単なる急場しのぎに過ぎないと、ひとは軽く考えている。こうした見解は全面的に支持しがたい。ギリシア人たちが自身が行ったように、ひとは自国の言語によって、数学や哲学や詩歌によってみずから教養を身につけることができる。もし古典古代の研究が3世紀前のようにもはやわれわれの知の源泉ではなく、われわれの知が今や独立しているということが真実であるとすれば、ひとは古典古代の研究を授業から排除して、例の別のより身近な教育手段でもってそれを置き換えなければならない。しかし実情はそうではない。依然としてすべての歴史はその半分は古典古代に基づいている。あらゆる体系の歴史を、つまり哲学の生成を、最初から新たに体験し抜かなかつた人は、依然として誰も正規の哲学者になり得ない。依然として古典古代の詩歌の作品は他のすべてのものよりも高尚である。それについての表面的な知識しかもたない人が、このことをわからないのである。依然としてどこにおいても古代におけるよりも高尚な精神は支配していない。最高に発展した状態にある若干の学問を排除すれば、とくに工学と一般に自然科学——精神の歴史としての文献学もそれとはあまり接触しないが——を排除すれば、あらゆるわれわれの知識は依然として古典古代に根ざしている。キリスト教は古代世界以外のどこで成立したのであろうか。古典古代の生に精通することなくして、誰が自分の基礎を、誰が自分の最初の生——そこへと立ち帰ることがみずからの復古の本来的な源泉である——を、誰が自分の命題をみずから理解することができるであろうか。たとえそれからどんなに大きな変化が生じていようと、ローマ法が相変わらずわれわれの法制度の基礎であることを、誰が否定できるであろうか。もし彼が単なる開業医や粗暴な経験主義者でないのであれば、いか

なる医者が古典古代を軽蔑できるであろうか。しばしば隠された宝が依然としてそこに眠っている。要するに、今日でもなおあらゆる学科の基礎となっているのは、われわれが古典古代と名づける歴史的研究のこの部分であり、それは幾千の分野でわれわれの教養ともつれ合い絡まり合っている。それに劣らず評価されるべきなのは、またこの研究が有している道徳的価値である。いたるところで古典古代は、純粋に人間的な、先入見から自由な、精神的な、恥ずべきこと (αἰσχρον) から遠ざかった見解を与え、そして人間を自由にする。ちなみに、先に述べた通り、われわれは形式的教養に対するその価値を否定するものではない。そしてわれわれは、古典古代の研究は〔研究するには〕最適の対象であり、そこで失われたものが再認識され得るのであるが、かかる研究によって学問的活動の完全に一つの面が、つまりあらゆる学問に対する文献学的活動が、予行演習されるのである、と主張する。これがあらゆるその種の研究の最良の予行演習 (προγυμνάσματα) であるが、しかし主要な重要さは実際の側面に置かれるべきである。古典古代はあらゆる学科の端緒と根源、つまり原始的概念と人類のいわゆる前知識を含んでいる。これは当然のことながら学校教育にとってまさに要素としてとくに適している。端緒はまさしく非常に重要である。通常は端緒のなかに最も精神的なもの、アルケー (ἀρχή) [始源のもの]、原理が存在しているが、こうしたものはひとがかならずしも再び端緒へと立ち帰らないとき、しばしば後続の時代には曇らせられる。われわれの文学は古典古代によってのみ偉大なものになった。ジャン・パウルはどこかでこう言っている、「もし若人が前もって偉大なるいにしえの時代と人間の静寂な神殿を通り抜けて、後代の生の年の市へと辿り着かないとしたら、現下の人類は究めがたいほど深く沈没していたことだろう」と。それでいてジャン・パウルは完全なる近代人である。ティエール [Louis Adolphe Thiers, 1797-1877.] フランスの政治家・歴史家。主著は『フランス革命史』全十巻 (1823-27)。] はこう言っている、「若者たちにギリシア語とラテン語を教えることによって教示できるものは、単に言葉にすぎないのではない。それは高貴で高尚な事柄である。それは単純で、偉大で、消しがたいイメージのもとで示される人類の歴史である。われわれの世紀と同様、一

世紀間若者を古典古代の美の源から、あるいは端的に美の源から遠ざけることは、われわれの道徳的低下を加速させること以外の何物でもないであろう。若者を嵐が吹き荒れることもなく、平和的で、健康的な避難所のような古典古代に放置しておこうではないか。その場所は間違いなく彼らを新鮮かつ純粹に保つてであろう」。あらゆる教養ある民族の精神的財産であり、そして古典古代人からわれわれへと継承されてきた思想、つまり教養ある人類一般の根本的見解は、言葉と同時に吸収されるのである。但し、欠点はもちろん払拭されるべきである。われわれは適度で、ある程度自立した教養を達成した今、われわれがその助けを借りてそれを達成したところの古典古代人なしで済ますことができると思う人は、屋根ができてしまえば苦もなく土台をないがしろにできる、と考えている〔ようなものである〕。

さて、以上のような限定のもとでの文献学が、ほとんどすべての学科の補助学 (Hilfswissenschaft) としてとして応用されている理由も、われわれの教養に対する古典古代研究の態度のなかに見出される。文献学と哲学は、もともと実践的な方向性をもたずに、ただ認識のために成立した。両者はのちに実践的になりもしたが、それはすべての学問が実践に影響を及ぼすからである。これに対して、爾余の学問はもともとは実践的なものであったし、ただちに生に関連づけられてきた。それらが理論的になり、それ自体のために営まれるようになるのはあとになってからであり、それも実践的なものを基礎づけるためにはじめてそうなったのである。したがって、このような関係でいえば、哲学と同様、文献学は、個々の学科がこれらのうちにその歴史的基礎を有しているかぎりにおいてのみ、補助学として立ち現れることができる。神学者、法律家、政治家については、このことは最も納得のゆくところである。建築術と造形芸術にとっては、少なくとも古典的文献学の一部は不可欠である。数学的諸科学と自然科学にとっても同様である。

文献学はその方法論によって第三の副次的目的を達成する。というのは、その方法論とは、認識についての認識、すなわち理解 (Verstehen) 一般の

理論を表しているからである。理解はすべての学問において応用へと至る、難しい技術である。なぜなら、すべての学問の発展と応用は共同作業によって起こるのであり、それゆえ一緒に仕事をしている学者たちの相互的理解を必要とするからである。そのかぎりでは文献学は、すべての学問にとって方法的予備教育 (eine methodische Propädeutik)⁴²なのである。

〔参考文献〕

文献学の理念、目的、応用については、かぎりなく多くのことがすでに記されている。際立ったものを取り出せば、ツェル『われわれの時代にとっての古典文学研究ならびに古代学の重要性と意義についての考察』(Zell, *Betrachtungen über die Wichtigkeit und Bedeutung des Studiums der klassischen Literatur und Alterthumskunde für unsere Zeit*, Freiburg 1830) — ヴェルカー『文献学の意義について』(Welcker, *Ueber die Bedeutung der Philologie* (1841), Kl. Schr. Bd. IV) — ボイムライン『理想的教養に対する古典研究の意義』(Bäumlein, *Die Bedeutung der klassischen Studien für eine ideale Bildung*, Heilbronn 1849) — ヘルプスト『現代における古典古代—歴史的考察—』(Herbst, *Das klassische Alterthum in der Gegenwart, eine geschichtliche Betrachtung*, Leipzig 1852) — O・ヤーン「ドイツにおける古代研究の意義と位置」(O. Jahn, *Bedeutung und Stellung der Alterthumsstudien in Deutschland*, Preuss. Jahrbücher 1859) [改訂されて論集『古典古代学から』 („Aus der Alterthumswissenschaft“, Bonn 1868) 1-50 頁に収録] — デーダーライン『公開講演』(Döderlein, *Oeffentliche Reden*, Frankfurt a/M. 1860) (そのなかの「われわれの時代に対する文献学の関係について」 („Ueber das Verhältniss der Philologie zu unserer Zeit“)) — ゲオルク・クルツィウス『文献学の歴史と

⁴²「予備教育」(Propädeutik)というのは、古典ギリシアの「エンキュリオス・パイディア」(ἐγκύκλιος παιδεία)に由来するものである(脚注4参照)。ベークはこれに続くIIにおいて、エンチクロペディーの概念を説明するくだりで、これについても言及しているので、詳しい説明はここでは省くが、プラトンでは、算術・幾何学・立体幾何学・天文学・和声学という全般的分野が、哲学的認識に至るための予備的訓練(προπαιδεία)と見なされていた。これがやがてローマに引き継がれて、《artes liberales》の理念を形づくるのである。

課題について』(Georg Curtius, *Über die Geschichte und Aufgabe der Philologie*, Ein Vortrag, Kiel 1862) — エルンスト・クルツイウス『ゲッティンゲン祝賀講演』(Ernst Curtius, *Göttinger Festreden*, Berlin 1864) (そのなかの「文献学の仲介的職務」〔„Das Mittleramt der Philologie“〕と「ギリシア文化の世界進出」〔„Der Weltgang der griechischen Cultur“〕〔これはまた『古典古代と現代』第一巻 (Alterthum und Gegenwart. I. Band, Berlin 1875. 3. Aufl. 1882) のなかに復刻されている])。〔W・クレム『古典的文献学の課題と位置, とりわけ対照言語学との関係について』(W. Clemm, *Ueber Aufgabe und Stellung der klassischen Philologie, insbesondere ihre Verhältniss zur vergleichenden Sprachwissenschaft*, Giessen 1872) — B・シュミット『古典的文献学の本質と意義について』(B. Schmidt, *Über Wesen und Stellung der klassischen Philologie*, Freiburg i. Br. 1879) — L・ランゲ『ギムナジウム教師の職業に関する古典的文献学と大学の関係について』(L. Lange, *Über das Verhältniss des Studiums der klassischen Philologie auf der Universität zu dem Berufe der Gymnasiallehrer*, Leipzig 1879) — F・ヘールデゲン『文献学の理念』(F. Heerdegen, *Die Idee der Philologie*, Erlangen 1879) — Fr・リツチュル『文献学的小品集』(Fr. Ritschl, *Kleine philologische Schriften*, V. Band. Vermischtes, Leipzig 1879)。そのなかの「文献学の最近の発展について」(„Ueber die neueste Entwicklung der Philologie“)と「文献学的研究の方法について」(„Zur Methode des philologischen Studiums“)。